

校異源氏物語・わかな上

朱雀院の御門ありしみゆきの後其比ほひよりれいならすなやみわたらせ給もとよりあつしくおはしますうちにこのたひは物心ほそくおほしめされてとしころをこなひのほいふかきをきさいの宮おはしましつる程はよろつは、かりきこえさせ給ていま、ておほしと、こほりつるを猶そのかたにもよをすにやあらむ世にひさしかるましき心ちなんするなどのたまはせてさるへき御心まうけともせさせ給ふ御こたちは春宮を、きたてまつりて女宮たちなん四ところおはしましけるその中にふちつほときこえしは先帝の源氏にそおはしましけるまた坊ときこえさせし時まいり給てたかきくらゐにもさたまり給へかりし人のとりたてたる御うしろみもおはせすは、かたもそのすちとなく物はかなきかういはらにてものし給ければ御ましらひの程も心ほそけにておほきさいの内侍督をまいらせたてまつり給てかたはらにならふ人なくもてなしきこえなとせし程にけおされてみかとも御心の中にいとおしき物には思きこえさせ給なからおりさせ給にしかはかひなくくちおしくて世の中をうらみたるやうにてうせ給にしその御はらの女三宮をあまたの御中にすくれてかなしき物に思かしつき、こえ給その程御とし十三四はかりおはすいまはとそむきすて山こもりしなん後の世にたちとまりてたれをたのむかけにて物し給はんとすらむとた、この御事をうしろめたくおほしなけくににし山なる御寺つくりはて、うつろはせ給はん程の御いそきをせさせ給にそへて又この宮の御もきの事をおほしいそかせ給院のうちにやんことなくおほす御たから物御てうと、もをはさらにもいはすはかなき御あそひ物まですこしゆへあるかきりをはた、この御方にとりわたしたてまつらせ給てそのつき／＼をなむことみこたちには御そふふんともありける春宮はかゝる御なやみにそへて世をそむかせ給へき御心つかひになときかせ給てわたらせ給へりは、女御もそひきこえさせ給てまいり給へりすぐれたる御おほえにしもあらさりしかと宮のかくておはします御すぐせのかきりなくめてたければとし比の御物かたりこまやかにきこえさせ給けり宮にもよろつの事世をたち給はん御心つかひなときこえしらせ給御うしろみとも、こなたかなたかろ／＼しからぬなからひにものし給へはいとうしろやすく思きこえさせ給この世にうらみのこる

事も侍らす女宮たちのあまたのこりと、まる行ききをおもひやるなんさらぬ別にもほたしなりぬへかりけるさきさき人のうへにみき、しにも女は心よりほかにあはくしく人におとしめらる、すぐせあるなんいとくちおしくかなしきいづれをも思やうならん御世にはさまくにつけて御心と、めておほしたつねよその中にうしろみなとあるはさるかたにも思ゆつり侍り三宮なむいはけなきやはひにてた、ひとりをたのもしき物とならひてうちすて、む後の世にた、よひさすらへむこといとくうしろめたくなしく侍と御目おしのこひつ、きこえしらせさせ給女御にも心うつくしきさまにきこえつけさせ給されと女御の人よりはまさりてときめき給ひしにみないとみかはし給しほと御なからひともえうるはしからさりしかはそのなこりにてけにいまはわさにくしなとはなくともまことに心と、めて思うしろみむとまてはおほさすもやとそおしはからる、かしあさ夕にこの御ことをおほしなかくとしくれ行ま、に御なやみまことにをものくなりまさらせ給てみすのともいてさせ給はす御もののけにて時くなやませ給こともありつれといとかくうちへをやみなきさまにはおはしまさ、りつるをこのたひは猶かきりなりとおほしめしたり御くらいをさせ給つれと猶その世にたのみそめたてまつり給へる人々はいまもなつかしくめてたき御ありさまを心やり所にまいりつかうまつり給かきりは心をつくしておしみきこえ給ふ六条院よりも御とふらひしはくあり身つかからもまいり給へきよしきこしめして院はいといたくよろこひきこえさせ給中納言の君まいり給へるをみすのうちにめしいれて御物かたりこまやかなり故院のうへのいまはのきさみにあまたの御ゆひこんありし中にこの院の御こといまのうちの御事なにとりわきての給をきしをおほやけとなりてことかきりありければうちくの御心よせはかはらすなからはかなきことのあやまりに心をかたてまつる事もありけんと思ふをとしころことにふれてそのうらみのこし給へるけしきをなんもらし給はぬさかしき人といへと身のうへになりぬれはことたかひて心うこきかならすそのむくひみえゆかめる事なんいにしへたにおほかりけるいかならんおりにかその御心はへほころふへからむと世人もおもむけうたかひけるをつゐにしのひすくし給て春宮などにも心をよせきこえ給いまはた又なくしたしかるへき中となりむつひかはし給へるもかきりなく心には思ひなから本上のをろかなるにそへてこのみちのやみにたちまじりかたくなるさまにやとて中くよその事にきこえはなちたるさまにてはへる内の御事はかの御ゆいこんたかへすつかうまつりをきてしかはかくすゑの世のあきらけき君としてきしかたの御おもおもおこし給ふほ

いのこといとうれしくなんこの秋の行幸の後いにしへの事とりそへてゆかしく
おほつかなくなんおほえ給たいめんきにきこゆへき事とはへりかならすみつか
らとふらひものし給へきよしもよをし申給へなとうちしほたれつゝのたまはす
中納言の君すき侍にけんかたはともかくもおもふたまへわきかたくはへりとし
まかりいり侍ておほやけにもつかうまつり侍あひた世中のことをみたまへまか
りありく程には大小のことにつけてもうちゝのさるへき物かたりなどのつい
てにもいにしへのうれはしきことありてなんなとうちかすめ申さるゝおりは侍
らすなんかくおほやけの御うしろみをつかうまつりさしてしつかなる思をかな
へむとひとへにこもりぬし後はなに事をもしらぬやうにて故院の御ゆいこんの
こともえつかうまつらす御くらゐにおはしましゝ世にはよはひの程も身のうつ
は物をもよはすかしこきかみの人々おほくてその心さしをとけて御らむせらる
ゝ事もなかりきいまかくまつりことをさりてしつかにおはしますころほひ心の
うちをもへたてなくまいりうけたまはらまほしきをさすかになにとなく所せき
身のよそほひにてをのつから月日をすくす事となんおりゝなけき申給なとそ
うし給二十にもまたわつかなる程なれといとよくとゝのひすくしてかたちもさ
かりににほひていみしくきよらなるを御めにとゝめてうちまもらせ給つゝこの
もてわつらはせ給ひめ宮の御うしろみにこれをやなと人しれすおほしよりけり
おほきおとゝのわたりにいまはすみつかれにたりとなとし比心えぬさまにきゝ
しかいとおしかりしをみゝやすき物からさすかにねたく思ことこそあれとのた
まはする御けしきをいかにのたまはするにとあやしく思めくらすにこのひめ宮
をかくおほしあつかひてさるへき人あらはあつけて心やすく世をも思はなれは
やとなんおほしのたまはするとをのつからもりきゝ給たよりありければさやう
のすちにやとは思ぬれとふと心えかほにもなにかはいらへきこえさせんたゝは
かゝゝしくも侍らぬ身にはよるへもさふらひかたくのみなんとはかりそうして
やみぬ女房などはそのきてみきこえていとありかたくもみえ給かたちよういか
なあなめてたなどあつまりてきこゆるをおいしらへるはいてさりとてかの院の
かはかりにおはせし御ありさまにはえなすらひきこえ給はさめりいとめもあや
にこそきよらにものし給しかなといひしろふをきこしめてまことにかれはい
とさまことなりし人そかしいまは又その世にもねひまさりてひかるとはこれを
いふへきにやとみゆるにほひなんいとゝくはゝりにたるうるはしたちてはか
ゝゝしきかたにみれはいつくしくあさやかにめをもよはぬこゝちするを又うち
とけてたはふれことをいひみたれあそへはそのかたにつけてはにる物なくあ

い行つきなつかしくうつくしきことのならひなきこそ世にありかたけれなに事にもさきの世おしはかられてめつらかなる人のありさまなり宮のうちにおひいてゝていわうのかきりなくなしき物にしたまひさはかりなてかしつきみにかへておほしたりしかと心のまゝにもおこらすひけして廿か内には納言にもならすなりにきかしひとつあまりてや宰相にて大将かけ給へりけんそれにこれはいとこよなくすゝみにためるはつき／＼のこのよのおほえのまさるなめりかしまことにかしきかたのさえ心もちゑなとはこれもおさ／＼おとるましくあやまりてもおよすけまさりたるおほえいとことなめりなとめてさせ給ひめ宮のいとうつくしけにてわかくな心なき御ありさまなるをみたてまつり給にもみはやしたてまつりかつは又かたをひならむ事をはみかくしをしへきこえつへからむ人のうしろやすからむにあつけきこえはやなときこえ給おとなしき御めのとゝもめしいてゝ御もきの程の事などのたまはするついでに六条のおとゝの式部卿のみこのむすめおほしたてけんやうにこの宮をあつかりてはくゝまん人もかなたゝ人の中にはありかたし内には中宮さふらひ給つき／＼の女御たちとてもいとやんことなきかきり物せらるゝにはか／＼しきうしろみなくてさやうのましらひいと中／＼ならむこの権中納言の朝臣のひとりありつる程にうちかすめてこそ心みるへかりけれわかれといときやうさくにおいさきたのもしけなる人にこそあめるをとの給はす中納言はもとよりいとまめ人にてとし比もかのわたりに心をかけてほかさまに思うつろふへくも侍らさりけるにそのおもひかなひてはいとゝゆるくかた侍らしかの院こそ中／＼猶いかなるにつけても人をゆかしくおほしたる心はたえす物せさせ給ふなれその中にもやむことなき御ねかひふかくて前齋院などをもいまにわすれかたくこそきこえ給なれと申すいてそのふりせぬあたけこそはいとうしろめたけれとはの給すれとけにあまたの中にかゝつらひてめさましかるへきおもひはありとも猶やかておやさまにさためたるにてさもやゆつりをきゝこえましなともおほしめすへしまことにすこしもよつきてあらせむと思はん女こもたらはおなくはかの人のあたりにこそはふれははせまほしけれいくはくならぬこの世のあひたはさはかり心ゆくありさまにてこそすくさまほしけれわれ女ならはおなしはらからなりともかならずむつひよりなましわかゝりし時などさなんおほえしまして女のおさむかれんはいとことはりそやとの給はせて御心の中にかむの君の御事もおほしいてらるへしこの御うしろみともの中をも／＼しき御めのとのせうと左中弁なるかの院のしたしき人にてとしころつかうまつるありけりこの宮にも心よせことにてさふらへは

まいりたるにあひて物かたりするついでにうへなむしかく御けしきありてきこえ給しをかの院におりあらはもらしきこえさせ給へみこたちはひとりおはしますこそはれの事なれとさまくにつけて心よせたてまつりな事に付けても御うしろみし給人あるはたのもしけなりうへを、きたてまつりて又ま心におもひきこえ給へき人もなければおのらはつかうまつるともなにはかりの宮つかへにかあらむ我心ひとつにしもあらてをのつからおもひのほかの事もおはしましかるくしききこえもあらむ時にはいかさまにかはわつらはしからむ御らんする世にともかくもこの御ことさたまりたはつかうまつりよくなんあるへきかしこきすちときこゆれと女はいとすぐせさためかたくおはします物なれはよろつになけしかしくかくあまたの御中にとりわききこえさせ給につけても人のそねみあへかめるをいかてちりもすゑたてまつらしかたらふに弁いかなるへき御事にかあらむ院はあやしきまで御心なかくかりにてもみそめ給へる人は御心とまりたるをも又さしもふかゝらさりけるをもかたくにつけてたつねとり給つゝあまたつとへきこえ給へれとやんことなくおほしたるはかきりありてひとかたなめれはそれにことよりてかひなけるすまひし給ふかたくこそはおほかめるを御すくせありてもしさやうにおはしますやうもあらはいみしき人ときこゆともたちならひておしたち給事はえあらしとこそはおしはからるれと猶いかゝとはゝからるゝことありてなんおほゆるさるはこの世のさかえすゑの世にすきて身に心もとなきことはなきを女のすちにてなん人のもときをもおひ我心にもあかぬ事もあるとなんつねにうちくのすさひことにもおほしの給はすなるけにをのれらかみたてまつるにもさなんおはしますかたくにつけて御影にかくし給へる人みなその人ならすたちくたれるきにはものし給はねとかきりあるたゝ人ともにて院の御ありさまにならふへきおほえくしたるやはおはするそれにおなしくはけにさもおはしまさはいかにたくひたる御あはひならむとかたらふをめのと又このついでにしかくなんなにかしのあそむにほめかし侍しかはかの院にはかならずうけひき申させ給てむとし比の御ほいかなひておほしぬへきことなるをこなたの御ゆるしまことにありぬへくはつたへきこえんとなん申侍しをいかなるへきことにかは侍らむ程くにつけて人のきはくおほしわきまへつゝありかたき御心さまに物し給なれとたゝ人たに又かゝつらひおもふ人たちならひたることは人のあかぬことにしはへめるをめさましき事もや侍らむ御うしろみのそみ給人ゝはあまたものし給めりよくおほしさためてこそよく侍らめかきりなき人ときこゆれといまの世のやうとはみなほか

らかにあるへかしくて世の中を御心とすくし給つへきもおはしますへかめるを
ひめ宮はあさましくおほつかなく心もとなくのみゝえさせ給にさふらふ人ゝは
つかうまつるかきりこそ侍らめおほかたの御心をきてにしたかひきこえてさか
しきしも人もなひきさふらふこそたよりあることに侍らめとりたてたる御うし
ろみものし給はさらむは猶心ほそきわさになん侍へきときこゆしかおもひたと
るによりなんみこたちのよつきたるありさまはうたてあはくしきやうにもあ
り又たかききはいへとも女はおどこにみゆるにつけてこそくやしけなる事も
めさましきおもひもをつからうちましるわさなめれとかつは心くるしく思ひ
みたるゝを又さるへき人にたちをくれてたのむかけともにわかれぬる後心をた
てゝ世中にすくさむ事もむかしは人の心たひらかにて世にゆるさるましき程の
事をは思をよはぬものとならひたりけんいまの世にはすきくしくみたりかは
しきこともるいにふれてきこゆめりかし昨日までたかきおやのいへにあかめら
れかしつかれし人のむすめのけふはなをくしくくたれるきはのすき物ともに
なをたちあさむかれてなきおやのおもてをふせかけをはつかしむるたくひおほ
くきこゆるいひもてゆけはみなおなしことなり程くにつけてすくせなといふ
なることはしりかたきわさなればよろつにうしろめたくなんすへてあしくもよ
くもさるへき人の心にゆるしをきたるまゝにて世中をすくすはすくせくにて
後の世におとろへあるときも身つからのあやまちにはならすありへてこよなき
さいはひありめやすきことになるおりはかくてもあしからさりけりとみゆれと
猶たちまちにふとうちきゝつけたる程はおやにしられさるへき人もゆるさぬ
に心つからのしのひわさしいてたるなん女の身にはますことなきゝすとおほゆ
るわさなるなをくしきたゝ人のなからひにてたにあはつけく心つきなき事な
り身つからの心よりはなれてあるへきにもあらぬを思ふ心よりほかに人にもみ
えすくせのほどさためられんなむいとかるくしく身のもてなしありさまく
おしはからるゝ事なるをあやしく物はかなき心さまにやとみゆめる御さまなる
をこれかれの心にまかせてもてなしきこゆるさやうなることの世にもりいて
んこといとうき事なりなどみすてたてまつり給はん後の世をうしろめたけに思
きこえさせ給へはいよくゝわつらはしく思あへりいますこし物をも思ひしり
給ほとまてみすくさんとこそはとしころねんしつるをふかきほいもとけすなり
ぬへき心ちのするに思もよをされてなんかの六条のおとゝはけにさりともの
ゝ心えてうしろやすきかたはこよなかりなんをかたくにあまたものせらるへ
き人ゝをしるへきにもあらすかしとてもかくても人の心から也のとかにおちる

ておほかたの世のためしともしろやすきかたはならひなくものせらるゝ人なりさらてよろしかるへき人たればかりかはあらむ兵部卿宮人からはめやすしかしおなしきすちにてことひとゝわきまへおとしむへきにはあらねとあまりいたくなよひよしめく程にをもきかたをくれてすこしかろひたるおほえやすゝみにたらむ猶さる人はいとたのもしけなくなんある又大納言の朝臣のいへつかさのそむなるさるかたにものまめやかなるへき事にはあなれとさすかにいかにそやさやうにおしなへたるきはゝ猶めさましくなんあるへきむかしもかうやうなるえらひにはなに事も人にことなるおほえあるにことよりてこそありけたゝひとへに又なくもちゐんかたはかりをかしこきことに思さためんはいとあかすくちおしかるへきわさになん右衛門督のしたにわふなるよし内侍督の物せられしその人はかりなんくらゐなといますこし物めかしき程になりなはなとかはとも思よりぬへきをまたとしいとわかくてむけにかろひたるほど也たかき心さしふかくてやもめにてすくしつゝいたくしつまり思あかれるけしき人にはぬけてさえなともことなくつゐには世のかためとなるへき人なれば行すゑもたのもしけれと猶又このためにと思はてむにはかきりそあるやとよろつにおほしわつらひたりかうやうにもおほしやらぬあね宮たちをはかけてもきこえなやまし給人もなしあやしくうちゝにのたまはする御さゝめき事ものをのつからひろこりて心をつくす人ゝおほかりけりおほきおとゝもこの衛門督のいまゝてひとりのみありてみこたちならすはえしとおもへるをかゝる御さためともいてきたなるをりにさやうにもおもむけたてまつりてめしよせられたらむ時いかばかり我ためにもめんほくありてうれしからむとおほしの給て内侍のかんの君にはかのあね北方してつたへ申給なりけりよろつかきりなきことの葉をつくしてそうせさせ御けしきたまはらせ給兵部卿宮は左大将の北の方をきこえはつし給てきゝ給らん所もありかたほならむことはとえりすくし給にいかゝは御心うこかさむかきりなくおほしいられたり藤大納言はとしころ院の別富にてしたしくつかうまつりてさふらひなれにたるを御山こもりし給なんのちより所なく心ほそかるへきにこの宮の御うしろみに事よせてかへりみさせ給へく御けしきせちに給はりたまふなるへし権中納言もかゝる事ともをきゝ給ふに人つてにもあらずさはかりおもむけさせたまへりし御けしきをみたてまつりてしかはをのつからたと心ときめきもしつへけれと女君のいまはとうちとけてたのみ給へるをとしころつらきにもことつけつへかりし程たにほかさまの心もなくすくしてしをあ

やにくにいまさらにたちかへりにわかに物をや思はせきこえんなのめならずや
むことなきかたにかゝつらひなはなに事も思まゝならてひたりみきにやすから
すは我身もくるしくこそはあらめなともとよりすきくしからぬ心なれは思し
つめつゝうちいてねとさすかにほかさまにさたまりはて給はんもいかにそやお
ほえてみゝはとまりけり春宮にもかゝる事ともきこしめしてさしあたりたるた
ゝいまのことよりも後の世のためしともなるへき事なり人からよろしとてもた
ゝ人はかきりあるを猶しかおほしたつことならはかの六条院にこそおやさまに
ゆつりきこえさせ給はめとなんわさとの御せうそことはあらねと御けしきあり
けるをまちきかせ給てもけにさること也いとよくおほしのたまはせたりといよ
く御心たゝせ給てまつかの弁してそかつくあないつたへきこえさせ給ける
この宮の御事かくおほしわつらふさまはさきくもみなきゝをき給へれは心く
るしきことにもあなるかなさはありとも院の御世のゝこりすくなしとてこゝに
は又いくはくたちをくれたてまつるへしとてかその御うしろみの事をはうけと
りきこえんけにしたいをあやまたぬにいましはしの程ものこりとまるかきり
あらはおほかたにつけてはいつれの御子たちをもよそにきゝはなちたてまつる
へきにもあらねと又かくとりわきてきゝをきたてまつりてんをはことにこそは
うしろみきこえめとおもふをそれたにいとふちやうなる世のさためなきなりや
との給てましてひとにたのまれたてまつるへきすちにむつひなれきこえんこと
はいと中くうちにうちつゝき世をさらむきさみ心くるしくみつからのためにもあ
さからぬほたしになんあるへき中納言などは年わかくかろくしきやうなれと
行ききとをくて人からもつるにおほやけの御うしろみともなりぬへきおいさき
なんめれはさもおほしやらむになとかよなからむされといいたくまめたち
て思ふ人さたまりにてそあめれはそれにはゝからせたまふにやあらむなどの給
て身つからはおほしはなれたるさまなるを弁はおほろけの御さためにもあらぬ
をかくの給へはいとおしくくちおしくも思てうちくにおほしたちにたるさま
なとくはしくきこゆれはさすかにうちえみつゝいとかなくしたてまつり給み
こなめれはあなちにかくきしかた行ききのたとりもふかきなめりかしなたゝ
うちにこそたてまつり給はめやんことなきまつの人ゝおはすといふことはよし
なき事なりそれにさはるへき事にもあらすかならずさりとてすゑの人をろかな
るやうもなしこ院の御時におほきさきのはうのはしめの女御にていきまき給し
かとむけのすゑにまいり給へりし入道の宮にしはしはおされ給にきかしこのみ
この御はゝ女御こそはかの宮の御はらからにものしたまひけめかたちもさしつ

きにはいとよしといはれ給し人なりしかはいつかたにつけてもこのひめ宮をしなへてのきにはよもおはせしをなといふかしくは思きこえ給へしとしもくれぬ朱雀院には御こゝち猶をこたるさまにもおはしまさねはよろつあはたゝしくおほしたちて御もきの事おほしいそくさまきしかた行さきありかたけなるまでいつくしくのゝしる御しつらひはかへ殿のにしおもてに御きちやうよりはしめてこゝのあやにしきをませさせ給はすもろこしのきさきのかさりをおほしやりてうるはしくことくしくかゝやくはかりとゝのへさせ給へり御こしゆひにはおほきおとゝをかねてよりきこえさせ給へりければことくしくおはする人にてまいりにくゝおほしけれと院の御事をむかしよりそむき申給はねはまいり給いまふた所の大臣たちそののこり上達部などはわりなきさはりあるもあなかにためらひたすけつゝまいり給みこたち八人殿上人はたさらにもいはす内春宮ののこらすまいりつとひていかめしき御いそぎのひゝき也院の御ことこのたひこそとちめなれとみかと春宮をはしめたてまつりて心くるしくきこしめしつゝ蔵人所おさめとのゝから物ともおほくたてまつらせ給へり六条院よりも人ゝのろくそん者の大臣の御ひきいて物などかの院よりそたてまつらせ給ける中宮よりも御さうそくくしのはこ心ことにてうせさせ給てかのむかしのみくしあけのくゆへあるさまにあらためくはへてさすかにもとの心はえもうしなはすそれとみせてその日の夕つかたたてまつれさせ給宮の権の佐院の殿上にもさふらふを御使にてひめ宮の御方にまいらすへくのたまはせつれとかゝることその中にありける

さしなからむかしをいまにつたふれはたまのをくしそ神さひにける院御らむしつけてあはれにおほしいてらるゝ事もありけりあえ物けしうもあらしとゆつりきこえ給へるほとけにおもたゝしきかむさしなれば御返もむかしのあはれをはさしをきて

さしつきにみる物にもかよろつ世をつけのをくしの神さふるまてとそいは

ひきこえ給へる御心ちいとくるしきをねんしつゝおほしおこしてこの御いそきはてぬれは三日すくしてつるに御くしおろし給よろしき程の人のうへにてたにいまはとてさまかはるはかなしけなるわさなれはましていとあはれけに御かたゝもおほしまとふ内侍のかんの君はつとさふらひ給ていみしくおほしいりたるををこしらへかね給て子を思ふ道はかきりありけりかく思しつみ給へる別のたへかたくもあるかなとて御心みたれぬへけれとあなかに御けうそくにかゝり給て山の座主よりはしめて御いむことのあさり三人さふらひてほうふくなとた

てまつる程この世をわかれ給御さほういみしくかなしけふは世を思すましたる僧たちなとたに涙もえと、めねはまして女宮たち女御更衣こゝらの男女かみしもゆすりみちてなきとよむにいと心あはた、しうかゝらてしつやかなる所にやかてこもるへくおほしまうけゝるほいたかひておほしめさるゝもたゝこのをさなき宮にひかされてとおほしのたまはす内よりはしめたてまつりて御とふらひのしけさいとさらなり六条院もすこし御心ちよろしくときゝたてまつらせ給てまいり給御たうはりの御ふなとこそみなおなしことおりゐのみかとゝひとしくさたまり給へれとまことの太上天皇の儀式にはうけはり給はす世のもてなし思きこえたるさまなとは心ことなれとことさらにそき給てれいのことゝしからぬ御車にたてまつりて上達部などさるへきかきり車にてそつかうまつり給へる院にはいみしくまちよろこひきこえさせ給てくるしき御心ちをおほしつよりて御たいめんありうるはしきさまならずたゝおはしますかたにおましよそひくはへていれたてまつり給へる御ありさまみたてまつり給ふにきしかた行ききくれてかなしくとめかたくおほさるれはとみにもえためらひ給はす故院にをくれたてまつりしころほひより世のつねなくおもふ給へられしかはこのかたのほいふかくすゝみ侍にしを心よはくおもふたまへたゆたふことのみ侍つゝつるにかくみたてまつりなし侍までをくれたてまつり侍ぬる心のぬるさをはつかしく思たまへらるゝかな身にとりてはことにもあるましくおもふ給へたち侍おりゝあるをさらにいとしのひかたきことおほかりぬへきわさにこそ侍けれとなくさめかたくおほしたり院も物心ほそくおほさるゝにえ心つよからすうちほたれ給ひつゝいにしへいまの御物かたりいとよはけにきこえさせ給てけふかあすかとおほえ侍つゝさすがに程へぬるをうちたゆみてふかきほいのはしにてもとけすなりなん事と思おこしてなんかくてもこのりのよはひなくはをこなひの心さしもかなふましけれとまつかりにてものとめをきて念仏をたにと思ひ侍るはかゝしからぬ身にても世になからふることたゝこの心さしにひきとゝめられたるとおもふ給へしられぬにしもあらぬをいままでつとめなきをこたりをたにやすからすなんとておほしをきてたるさまなとくはしくの給はするつゐてに女みこたちをあまたうちすて侍なん心くるしき中にも又思ゆつる人なきをはとりわきうしろめたくみわつらひ侍とてまほにはあらぬ御けしき心くるしくみたてまつり給御心のうちにもさすかにゆかしき御ありさまなれはおほしすくしかたくてけにたゝ人よりもかゝるすちにはわたくしさまの御うしろみなきはくちおしけなるわさになん侍ける春宮かくておはしませはいとかしこきすゑの世のまう

けの君とあめのしたのたのみ所にあふきゝこえさするをましてこの事ときこえをかせ給はんことはひとことゝしておろそかにかろめ申給へきに侍らねはさらに行さきのことおほしなやむへきにも侍らねとけに事かきりあれはおほやけとなり給よのまつりこと御心になふへしとはいひながら女の御ためになにはかりのけさやかなる御心よせあるへきにも侍らさりけりすへて女の御ためにはさまゝまことの御うしろみとすへき物は猶さるへきすちに契をかはしえさらぬことにはくゝみきこゆる御まもりめ侍なんうしろやすかるへき事にはつるを猶しひて後の世の御うたかひのこるへくはよろしきにおほしえらひてしのひてさるへき御あつかりをさためをかせ給へきになむはへなるとそうし給さやうに思よる事侍れとそれもかたき事になんありけるいにしへのためしをきゝ侍にも世をたもつさかりのみこにたに人をえらひてさるさまの事をし給へるたくひおほかりけりましてかくいまはこの世をはなるゝきはにてことゝしく思へきにもあらねと又しかすつる中にもすてかたき事ありてさまゝに思わつらひ侍ほとにやまひはをもりゆく又とりかへすへきにもあらぬ月日のすきゆけは心あはたゝしくなむかたはらいたきゆつりなれとこのいはけなき内親王ひとりとりわきてはくゝみおほしてさるへきよすかをも御心におほしさためであつけ給へときこえまほしきを権中納言などのひとりものしつる程すゝみよるへくこそありけれおほいまうち君にせんせられてねたくおほえ侍ときこえ給中納言の朝臣のまめやかなるかたはいとよくつかうまつりぬへく侍をなに事もまたあさくてたよりすくなくこそ侍らめかたしけなくともふかき心にてうしろみきこえさせ侍らむにおはします御かけにかはりてはおほされしをたゝ行さきみしかくてつかうまつりさすことや侍らむとうたかはしきかたのみなん心くるしくはへるへきとうけひき申給つ夜にいりぬれはあるしの院かたもまらうとの上達部たちもみな御前にてあるしのことさうし物にてうるはしからすなまめかしくせさせ給へり院の御前にせんかうのかけはんに御はちなどむかしにかはりてまいるを人ゝ涙おしのこひ給あはれなるすちの事ともあれとうるさければかゝす夜ふけてかへり給ふろくともつきゝにたまふ別富大納言も御をくりにまいり給あるしの院はけふの雪にいと、御風くはゝりてかきみたりなやましくおほさるれとこの宮の御ときこえさためつるを心やすくおほしけり六条院はなま心くるしうさまゝおほしみたるむらさきのうへもかゝる御さためなとかねてもほのきゝ給けれとさしもあらし前斎院をもねんころにきこえ給やうなりしかとわさとしもおほしとけすなりにしをなとおほしてさることやあるともとひきこえ給はすな

に心もなくておはするにいとおしくこの事をいかにおほさん我心は露もかはるましくさることあらむにつけては中くいとふかさこそまさらめみさため給はさらむほとにかに思うたかひ給はんなどやすからすおほさるいまのとしころとなりてはましてかたみにへたてきこえ給ことなくあはれなる御なかなれはしはし心にへたてのこしたる事あらむもいふせきをその夜はうちやすみてあかし給つ又の日雪うちふり空のけしきも物あはれにすきにしかた行さきの御物かたりきこえかはし給院のたのもしけなくなり給にたる御とふらひにまいりてあはれなる事とものありつるかな女三宮の御事をいとすてかたけにおほしてしかくくなむのたまはせつけしかは心くるしくてえきこえいなひすなりにしをことくしくそ人はいひなさんかしいまはさやうのこともうるくしくすさましく思ひなりにたれは人つてにけしきはませ給しにはとかくのかれきこえしをたいめんのついてに心ふかきさまなる事とものを給つ、けしにはえすくくしくもかへさひ申さてなんふかき御山すみにうつろひ給はん程にこそはわたしたてまつらめあちきなくやおほさるへきいみしきことありとも御ためあるよりかはる事はさらにあるましきを心なをき給そよかの御ためこそ心くるしからめそれもかたはならすもてなしてむたれもくのとかにてすくし給は、なときこえ給はかなき御すさひことをたにめさましき物におほして心やすからぬ御心さまなれはいか、おほさんとおほすにいとつれなくてあはれなる御ゆつりにこそはあなれこ、にはいかなる心を、きたてまつるへきにかめさましくかくてなとかめらるましくは心やすくてもはへなんをかのは、女御の御方さまにてもうとからすおほしかすまへてむやとひけし給をあまりかう、ちとけ給御ゆるしもいかなれはどうしろめたくこそあれまことはさたにおほしゆるいてわれも人も心えてなたらかにもてなしすくし給は、いよくあはれになむひかこときこえなとせん人の事き、いれ給なすへて世の人のくちといふ物ななにかいひいつる事ともなくをのつから人のなからひなとうちほをゆかみおもはすなる事いてくる物なるを心ひとつにしつめてありさまにしたかふなんよきまたきにさはきてあいなきものうらみし給なといとよくをしへきこえ給心のうちにもかくそらよりいてきにたるやうなる事にてのかれ給かたきをにくけにもきこえなさし我心には、かり給ひいさむることにしたかひ給へきをかとちの心よりおこれるけさうにもあらすせかるへきかたなきものからおこかましく思むすほ、る、さま世人にもりきこえし式部卿宮のおほきたの方つねにうけはしけなる事とものを給いてつ、あちきなき大将の御ことにてさへあやしくうらみそねみ給ふなるをかやう

にきゝていかにいちしるく思あはせ給はんなどおひらかなる人の御心といへといかてかはかりのくまはなからむいまはさりととのみ我身を思ひあかりうらなくてすくしける世の人わらへならん事をしたには思つゝけ給へといとおひらかにのみもてなし給へりとしもかへりぬ朱雀院にはひめ宮六条院にうつろひ給はん御いそきをし給きこえ給へる人ゝいとくちおしくおほしなけく内にも御心はえありてきこえ給ける程にかゝる御さためをきこしめしておほしとまりにけりさるはことしそよそちになり給ければ御賀の事おほやけにもきこしめしすくさす世中のいとなみにてかねてよりひゝくをことのわつらひおほくいかめしき事はむかしよりこのみ給はぬ御心にてみなかへさひ申給正月廿三日ねのひなるに左大将殿の北方わかなまいり給かねてけしきもゝらし給はていといたくしのひておほしまうけたりければはかにてえいさめかへしきこえ給はすしのひたれとさはかりの御いきをひなれはわたり給御きしきなといとひゝきことなりみなみのおとゝのにしのはなちいてにおましよそふ屏風かへしろよりはしめあたらしくはらひしつらはれたりうるはしくいしなとはたてす御ちしき四十まい御しとねけうそくなとすへてその御くともいときよらにせさせ給へりらてんのみつしふたよろひに御ころもはこよつすへて夏冬の御さうそくかうこくすりのほこ御すゝりゆするつきかゝけのはこなとやうの物うちゝきよらをつくし給へり御かさしのたいにはちんしたむをつくりめつらしきあやめをつくしおなしきかねをも色つかひなしたる心はえありいまめかしくかんの君ものゝみやひふかくかときめき給へる人にてめなれぬさまにしなし給へるおほかたの事をはことさらにことゝしからぬ程なり人ゝまいりなとし給ておましにいて給とてかんの君に御たいめんあり御心のうちにはいにしへおほしいつる事ともさまゝなりけんかしいとわかくきよらにてかく御賀などいふことはひかかそへにやとおほゆるさまのなまめかしく人のおやけなくおはしますをめつらしくてとし月へたてゝみたてまつり給はいとはつかしけれと猶けさやかなるへたてもなくて御物かたりきこえかはし給をさなき君もいとうつくしくてものし給かむの君はうちつゝきても御覽せられし事との給けるを大将のかゝるついてにたに御らむせさせんとてふたりおなしやうにふりわけかみのなに心なきなをしすかたともにておはすするよはひも身つからの心にはことに思とかめられすたゝむかしなからのわかゝしきありさまにてあらたむることもなきをかゝるすゑゝのもよをしになんまはしたなきまで思しらるゝおりも侍ける中納言のいつしかとまうけたなるをことゝしく思ひへたてゝまたみせずかし人よりことにかそ

へとり給けるけふのねのひこそ猶うれたけれしは老をわすれても侍へきを
ときこえ給かんの君もいとよくねひまさりものくしきけさへそひてみるかひ
あるさまし給り

わか葉さす野へのこ松をひきつれてもとのいはねをいのるけふかなとせめ
てをとなひきこえ給ちんのおしきよつして御わかなさまはかりまいり御かは
らけとり給て

小松はらす糸のよはひにひかれてやのへのわかなも年をつむへきなときこ

えかはし給て上達部あまたみなみのひさしにつき給式部卿宮はまいりにく、お
ほしけれと御せうそこありけるにかくしたしき御なからひにて心あるやうなら
むもひんなくて日たけてそわたり給へる大将のしたりかほにてかゝる御なから
ひにうけはりてもなし給もけに心やましけなるわさなめれと御むまこの君たち
はいつかたにつけてもおりたちてさうやくし給こものよそえたおりひつ物よそ
ち中納言をはしめたてまつりてさるへきかきとりつゝき給へり御かはらけく
たりわかなの御あつい物まいるおまへにはちんのかけはん四おほむつきともな
つかしくいまめきたる程にせられたり朱雀院の御くすりの事猶たひらきはて給
はぬにより楽人などはめさす御ふえなどおほきおとゝのそのかたはとゝのへ給
て世中にこの御賀より又めつらしくきよらつくすへき事あらしとの給てすくれ
たるねのかきりをかねてよりおほしまうけたりければしのひやかに御あそひあ
りとりくゝにたてまつる中に和琴はかのおとゝの第一にひし給ける御こと也さ
る物の上手の心をとゝめてひきならし給へるねいとならひなきをこと人はかき
たてにくゝしたまへは衛門督のかたくいなるをせめ給へはけにいとおもしろ
くおさくゝをとるましくひくなに事も上手のつきといひなからかくしもえつか
ぬわさそかしと心にくゝあはれに人々おほすしらへにしたかひてあとあるてと
もさたまれるもろこしのつたへともは中くゝたつねしるへきかたあらはなるを
心にまかせてたゝかきあはせたるすかかきによろつの物のねとゝのへられたる
はたへにおもしろくあやしきまでひゝくちゝおとゝはことのをもいとゆるには
りていたうくたしてしらへひゝきおほくあはせてそかきならし給これはいとわ
らゝかにのほるねのなつかしくあい行つきたるをいとかうしもはきこえざりし
をとみこたちもおとろき給琴は兵部卿宮ひき給ふこの御ことは宜陽殿の御もの
にてたいくゝに第一の名ありし御ことをこ院のすゑつかた一品宮のこのみ給こ
とにてたまはり給へりけるをこのおりのきよらをつくし給はんとするためおと
ゝの申給はり給へる御つたへくゝをおほすにいとあはれにむかしの事も恋しく

おほしいてらるみこもえいなきえと、め給はす御けしきとり給て琴はおまへに
ゆつりきこえさせ給ふ物のあはれにえすくし給はてめつらしき物ひとつはかり
ひき給にことくしからねとかきりなくおもしろき夜の御あそひなりさうかの
人々みはしにめしてすぐれたるこゑのかきりいたしてかへり声になる夜のふけ
行まゝに物のしらへともなつかしくかはりてあをやきあそひ給ほとけにねくら
のうくひすおとろきぬへくいみしくおもしろしわたくしことのさまにしなし給
てろくなときやうさくにまうけられたりけりあか月にかんの君かへり給御
をくり物なとありけりかうよをすつるやうにてあかしくらす程にとし月のゆく
ゑもしらすかほなるをかうかそへしらせ給へるにつけては心ほそくなん時く
はおひやまさるとみたまひくらへよかしかくふるめかしき身の所せさにおもふ
にしたかひてたいめんなきもいとくちおしくなんときこえ給てあはれにもお
かしくも思いてきこえ給ことなきにしもあらねは中くほのかにてかくいそき
わたり給をいとあかすくちおしくそおほされけるかむの君もまことのおやは
さるへき契はかりに思きこえ給てありかたくこまかなりし御心はえをとし月に
そへてかく世にすみはて給につけてもをろかならす思ひきこえ給けりかくてき
さらきの十よ日に朱雀院のひめ宮六条院へわたり給この院にも御心まうけよ
つねならすわかなまいりしにしのはなちいてに御丁たてゝそなたの一二のたい
わた殿かけて女房のつほねくまでこまかにしつらひみかゝせ給へりうちにま
いり給人のさほうをまねひてかの院よりも御てうとなとはこはるわたり給きし
きいへはさらなり御をくりにかむたちめなとあまたまいり給かのけいしのそみ
給し大納言もやすからす思なからさふらひ給御車よせたる所に院わたり給てお
ろしたてまつり給なともれいにはたかひたる事とも也たゝ人におはすればよろ
つの事かきりありて内まいりにもにすむこのおほ君といはんにもことたかひて
めつらしき御なかのあはひともになん三日かほとかの院よりもあるしの院かた
よりもいかめしくめつらしきみやひをつくし給たいのうへもことにふれてたゝ
にもおほされぬ世のありさまなりけにかゝるにつけてこよなく人にをとりけた
るゝ事もあるましかれと又ならふ人なくならひ給てはなやかにおひさきとをく
あなつりにくきけはひにてうつろひ給へるになまはしたなくおほさるれとつれ
なくのみもてなして御わたりの程ももろ心にはかなきこともしいて給ていとら
うたけなる御ありさまをいとゝありかたしと思きこえ給ひめ宮はけにまたいと
ちいさくかたなりにおはするうちにもいとはいはけなきけしきしてひたみちにわ
かひ給へりかのむらさきのゆかりたつねとり給へりしおりおほしいつるにかれ

はされていふかひありしをこれはいはけなくのみみえ給へはよかめりにく
けにをしたちたることなどはあるましかめりとおほす物からいとあまり物のほ
へなき御さまかなとみたてまつり給三日か程はよかれなくわたり給をとしころ
さもならひ給はぬ心ちにしのふれと猶ものあはれなり御そともなといよくた
きしめさせ給ものからうちなかめてものし給けしきいみしくらうたけにおかし
なとてよろつの事ありとも又人をはならへてみるへきそあたしく心よはく
なりをきにける我をこたりにかゝる事もいてくるそかしわけれと中納言をは
えおほしかけすなりぬめりしをとわれなからつらくおほしつゝくるに涙くまれ
てこよひはかりはことほりとゆるし給てんなこれよりのちのとたえあらむこそ
身なからも心つきなかるへけれまたさりとてかの院にきこしめさんことよと思
ひみたれ給へる御心のうちくるしけなりすこしほゝえみて身つからの御心なか
らたにえさため給ましかなるをましてことほりもなにもいつこにとまるへきに
かといふかひなけにとりなし給へはゝつかしうさへおほえ給てつらつえをつき
給てよりふし給へれば女君すゝりをひきよせて

めにちかくうつれはかはる世の中を行すゑとをくたのみけるかなふること
などかきませ給をとりてみ給てはかなきことなれとけにとことほりにて

命こそたゆともたえめさためなきよのつねならぬ中の契をとみにもえわた

り給はぬをいとかたはらいたきわさかなとそゝのかしきこえたまへはなよゝか
におかしきほとにえならすにほひてわたり給をみいたし給もいとたゝにはあら
すかしとしころさもやあらむと思しことゝもいまはとのみもてはなれ給つゝ
さらはかくこそはとうちとけ行すゑにありくゝてかく世のきゝみゝもなのめな
らぬ事のいてきぬるよ思さたむへき世のありさまにもあらさりければいまより
のちもうしろめたくそおほしなりぬるさこそつれなくまきはし給へとさふら
ふ人ゝもおもはすなる世なりやあまたものし給やうなれといつかたもみなこな
たの御けはひにはかたさはゝかるさまにてすくし給へはこそ事なくなたらか
にもあれおしたちてかはかりなるありさまにけたれてもえすくし給まし又さり
とてはかなきことにつけてもやすからぬ事のあらむおりくゝかならすわつらは
しきことともいてきなむかしなとをのかしゝうちかたらひなけかしけなるをつ
ゆもみしらぬやうにいとけはひおかしく物かたりなし給つゝ夜ふくるまてお
はすかう人のたゝならすいひ思たるもきゝにくしとおほしてかくこれかれあま
たものし給めれと御心になひていまめかしくすぐれたるきはにもあらずとめ
なれてさうくしくおほしたりつるにこの宮のかくわたり給へるこそめやすけ

れ猶わらは心のうせぬにやあらむ我もむつひてきこえてあらまほしきをあいなくへたてあるさまに人々とりなさむとすらんひとしき程をとりさまなど思ふ人にこそたゝならすみゝたつこともをのつからいてくるわさなれかたしけなく心くるしき御ことなめれはいかて心をかれたてまつらしとなむ思などの給へはなかつかさ中将の君などやうの人々めをくはせつゝあまりなる御思やりかななといふへしむかしはたゝならぬさまにつかひならし給し人ともなれとゝしころはこの御方にさふらひてみな心よせきこえたるなめりこと御かたゝよりいかにおほすらむもとより思はなれたる人々は中々心やすきをなとおもむけつゝとふらひきこえ給もあるをかくおしはかる人こそなかゝくるしけれ世中もいとつねなきものをなとてかさのみは思なやまむなとおほすあまりひさしきよひるもれいならず人やとかめんと心のおにゝおほして入給ぬれば御ふすまいりぬれとけにかたはらさひしきよなくへにけるも猶たゝならぬ心地すれとかのすまの御わかれのおりなとおほしいつれはいまはとかけはなれ給てもたゝおなし世のうちにきゝたてまつらましかはと我身までのことはうちをきあたらしくかなしかりしありさまそかしさてそのまきれに我も人もいのちたえすなりなましかはいふかひあらまし世かはとおほしなをす風うち吹たる夜のけはひひやゝかにてふともねいられ給はぬをちかくさふらふ人々あやしとやきかむとうちもみしろき給はぬも猶いとくるしけなりよふかきとりのこゑのきこえたるものあはれなりわさとつらしとにはあらねとかやうに思みたれ給ふけにやかの御ゆめにみえ給ければうちおとろき給ていかにと心さはかし給にとりのねまちいて給へれば夜ふかきもしらすかほにいそきいて給いといはけなき御ありさまなればめのとたちゝかくさふらひけりつまとおしあけていて給をみたてまつりくるあけくれの空に雪のひかりみえておほつかなしなこりまてとまれる御にほひやみはあやなしひとりこたる雪はところゝきえのこりたるかいとしろき庭のふとけちめみえわかれぬほとなるになをのこれる雪としのひやかにくちすさみ給つゝみかうしうちたゝき給もひさしくかゝることなかりつるならひに人々もそらねをしつゝやゝまたせたてまつりてひきあけたりこよなくひさしかりつるに身もひえにけるはをちきこゆる心のをろかならぬにこそあめれざるはつみもなしやとて御そひきやりなし給にすこしぬれたる御ひとへの袖をひきかくしてうらもなくなつかしき物からうちとけてはたあらぬ御よいなといとはつかしけにおかしき人ときこゆれとかたかめるよをとおほしくらへらるよろついにしへのことをおほしいてつゝとけかたき御けしきをうらみきこ

え給てその日はくらし給へはえわたりたまはてしんてんには御せうそこをきこえ給けさの雪に心ちあやまりていとなやましく侍れは心やすき方にためらひ侍とあり御めのとききこえさせ侍ぬとはかりことはにきこえたりことなる事なの御返やおほす院にきこしめさんこともいとをしこのころはかりつくろはんとおほせとえさもあらぬをさは思し事そかしあなくなるしと身つからおもひつ、け給女君も思やりなき御心かなとくるしかり給けさはれのやうにおほとのもりおきさせ給て宮の御かたに御ふみたまつれ給ことにはつかしけもなき御さまなれと御ふてなとひきつくろひてしろきかみに

なみちをへたつるほとはなけれども心みたる、けさのあは雪むめにつけ

給へり人めしてにしのわた殿よりたてまつらせよとの給やかてみいたしてはしちかくおはしますしろき御そもをき給て花をまさくり給つ、ともまつ雪のほのかにのこれるうへにうちちりそふそらをななめ給へりうくひすのわかやかにちかきこうはいのすゑにうちなきたるを袖こそにほへと花をひきかくしてみすおしあけてななめ給へるさまゆめにもかゝる人のおやにてをもきくらゐとみえ給はすわかうなまめかしき御さまなり御かへりすこし程ふる心ちすれはいり給て女君に花みせたてまつり給はなといは、かくこそにほはまほしけれなさくらにうつしては又ちりはかりも心わくるかたなくやあらましの給これもあまたうつろはぬほとめとまるにやあらむはなのさかりにならへてみはやなどの給に御返ありくれなるのうすやうにあさやかにをしつ、まれたるをむねつふれて御てのいとわかきをしはしみせたてまつらてあらはやへたつとはなけれどあはくしきやうならんは人のほとかたしけなしとおほすにひきかくし給はんも心をき給へければかたそはひろけ給へるをしりめにみをこせてそひふし給へり

はかなくてうはのそらにそきえぬへき風にたゝよふ春のあは雪御てけにい

とわかくをさなけなりさはかりの程になりぬる人はいとかくはをはせぬ物をとめとまれとみぬやうにまきはしてやみ給ぬこと人のうへならはさこそあれなとはしのひてきこえ給へれといとおしくてたゝ心やすくを思なし給へとのみきこえ給けふは宮の御方にひるわたり給心ことにうちけさうし給へる御ありさま今みてまつる女房などはましてみるかひありと思きこゆらむかしおほんめのとなとやうのおいしらへる人ゝそいてやこの御ありさまひと所こそめてたけれめさましきことはありなむかしとうちませて思ふもありける女宮はいとらうたけにおさなきさまにて御しつらひなとのことくしくよたけくうるはしき身つからはなに心もなくものはかなき御程にていと御そかちに身もなくあえか

なりことにはちなともし給はすた、ちこのおもきらひせぬ心ちして心やすくう
つくしきさまし給へり院のみかとはを、しくすくよかなるかたの御さえなとこ
そ心もたなくおはしますと世人思ためれをかしきすちになまめきゆへゆへしき
かたは人にまさり給へるをなとてかくおひらかにおほしたて給ひけんさるはい
と御心と、め給へるみことき、しをと思もなまぐちおしけれとにくからすみた
てまつり給た、きこえ給ふま、になよく／＼となひき給て御いらへなとをもおほ
え給けることはいはけなくうちの給いて、えみはなたすみえ給むかしの心なら
ましかはうたて心をとせましをいまは世中をみなさま／＼に思なたらめとと
あるもかゝるもきは、なる、ことはかたき物なりけりとり／＼にこそおほうは
ありけれよその思ひはいとあらまほしき程なりかしとおほすにさしならひめか
れすみたてまつり給へるとしころよりもたいのうへの御ありさまそなをありか
たくわれなからもおほしたてけりとおほす一夜のほどあしたのまもこひしくお
ほつかなくいと、しき御心さしのまさるをなとかくおほゆらんとゆゑしきまで
なむ院のみかとは月のうちにみてらにうつろひ給ぬこのゑんにあはれなる御せ
うそこともきこえ給ひめ宮の御ことはさらなりわつらはしくいかにきく所やな
とは、かり給ことなくてともかくもたゝ御心にかけてもてなし給へくそたひ
／＼きこえ給けるされとあはれにうしろめたくをさなくおはするを思きこえ給
けりむらさきのうへにも御せうそこゝとにありをさなき人の心ちなきさまにて
うつろひものすらむをつみなくおほしゆるしてうしろみたまへたつね給へきゆ
へもやあらむとそ

そむきにしこの世にのこるこゝろこそいる山みちのほたしなりけれやみを

えはるけてきこゆるもおこかましくやとありおとゝもみ給てあはれなる御せう
そこをかしこまりきこえ給へとて御使にも女房してかはらせしいてさせ給て
しゑさせ給御かへりはいかゝなときこえにくゝおほしたれとこと／＼しくおも
しろかるへきおりのことならねはたゝこゝろをのへて

そむくよのうしろめたくはさりかたきほたしをしゑてかけなはなれそなと

やうにそあめりし女のさうそくにほそなかそへてかつけ給御てなどのいとめて
たきを院御覽してなに事もいとつかしけなめるあたりにいはけなくてみえ給
らむ事いと心くるしうおほしたりいまはとて女御更衣たちなどをのかしゝわか
れ給ふもあはれなることなむおほかりける内侍のかむの君はこきさいの宮のお
はしましし二条の宮にそすみ給ひめみやの御ことをきてはこの御ことをなむ
かへりみかちにみかともおほしたりけるあまになりなんとおほしたれとかゝる

きほひにはしたふやうに心あはたしといさめ給てやう／＼仏の御ことなとい
そかせ給六条のおとゝはあはれにあかすのみおほしてやみにし御あたりなれは
としころもわすれかたくいかならむおりにたいめあらむいま一たひあひみてそ
のよのこともきこえまほしくのみおほしわたるをかたみに世のきゝみゝもはゝ
かり給へき身のほとにいとおしけなりしよのさはきなどもおほしいてらるれば
よろつにつゝみすくし給けるをかうのとやかになり給て世中をおもひしつまり
給らむころほひの御ありさまいよいゆかしく心もとなければあるまじき事と
はおほしなからおほかたの御とふらひにことつけてあはれるさまにつねにき
こえ給わか／＼しかるへき御あはひならねは御かへりもとき／＼につけてきこ
えかはし給ふむかしよりもこよなくうちくしとゝのひはてにたる御けはひをみ
給にも猶しのひかたくてむかしの中納言の君のもとにも心ふかき事ともをつね
にの給ふかの人のせうとなるいつみのさきのかみをめしよせてわか／＼しくい
にしへにかへりてかたらひ給人つてならてもものこしにきこえしらすへきことな
んあるさりぬへきこえなひかしていみしくしのひてまいらむいまはさやうの
ありきもところせき身の程におほろけならすしのふれはそこにも又人にはもら
し給はしとおもふにかたみにこゝろやすくななどの給かむの君いてやよのな
かを思ふにつけてもむかしよりつらき御心をこゝら思つめつるところのは
てにあはれにかなしき御ことをさしをきていかなるむかしかたりをかきこえむ
けに人はもりきかぬやうありとも心のはんこそいとはつかしかるへけれどう
ちなけき給つゝなをさらにあるまじきよしをのみきこゆいにしへわりなかりし
世にたに心かはし給はぬ事にもあらさりしをけにそむき給ぬる御ためうしろめ
たきやうにはあれとあらさりし事にもあらねはいましもけさやかにきよまはり
てたちにし我名いまさらにとりかへし給へきにやとおほしをこしてこのしのた
のもりをみちのしるへにてまうて給女君にはひんかしの院にものするひたちの
君のひころわつらひてひさしくなりにけるを物さはかしきまきれにとふらはね
はいとおしくてなんひるなとけさやかにわたらむもひんなきをよのまにしのひ
てとなん思侍る人にもかくともしらせしときこえ給ていといたく心けさうし給
をれいはさしもみえ給はぬあたりをあやしとみ給て思あはせ給事もあれとひめ
宮の御ことのちはなにこともいとすきぬるかたのやうにはあらすすこしへた
つる心そひてみしらぬやうにておはすその日はしん殿へもわたり給はて御ふみ
かきかはし給たき物などに心をいれてくらし給ふよひすくしてむつまじき人の
かきり四五人はかりあしろくるまのむかしおほえてやつれたるにていて給いつ

みのかみして御せうそこきこえ給かくわたりおはしましたるよしきゝめきゝこゆれはおとろき給てあやしくいかやうにきこえたるにかとむつかり給へとおかしやかにてかへしたてまつらむにいとひんなう侍らむとてあなかに思めぐらしていたてまつる御とふらひなときこえ給てたゝこゝもとに物こしにてもさらにむかしのあるましき心などはこのらすなりにけるをとわりなくきこえたまへはいたくなけくゝゐさりいて給へりされはよ猶けちかさはとかつおほさるかたみにおほろけならぬ御みしろきなれはあはれもすくなからすひんかしのたになりけりたつみのかたのひさしにすゑたてまつりてみさうしのしりはかためたれはいとわかやかなる心ちもするかなとし月のつもりをもまきれなくかそへらるゝこゝろならひにかくおほめかしきはいみしうつらくこそとくらみきこえ給夜いたくふけ行たまもにあそふをしのこゑゝゝなどあはれにきこえてしめくゝと人めすくなき宮のうちのありさまもさもうつり行世哉とおほしつゝくるに平中かまねならねとまことに涙もろになんむかしにかはりておとなおとなしくはきこえ給ものからこれをかくてやとひきうこかしたまふ

とし月を中にへたてゝあふさかのさもせきかたくおつる涙か女

なみたのみせきとめかたきしみつにて行あふみちはゝやくたえにきなとか

けはなれきこえ給へといにしへをおほしいつもたれによりおほうはさるいみしきこともありし世のさはきそはと思ひて給にけにいま一たひのたいめむはありもすへかりけりとおほしよはるももとよりつしやかなる所はおはせさりし人のとしころはさまゝに世中を思しりきしかたをくやしくおほやけわたくしの事にふれつゝかすもなくおほしあつめていといたくすくし給にたれとむかしおほえたる御たいめんによの事もとをからぬ心地してえ心つよくもゝてなし給はすなをらうゝしくわかうなつかしくてひとかたならぬ世のつゝましさをあはれをも思ひたれてなけきかちにてものし給けしきなといまはしめたらむよりもめつらしくあはれにてあけ行もいとくちおしくてたまはんそもなしあさほらけのたゝならぬ空にもゝちとりのこゑもいとうらゝかなり花はみなちりすきてなこりかすめるこすゑのあさみとりなるこたちむかしふちのえむし給しこのころの事なりけんかしとおほしいつるとし月のつもりにけるほとものおりの事かきつゝけあはれにおほさる中納言の君みたてまつりをくるとてつまとおしあけたるにたちかへり給てこのふちよいかにそめけむいろにかなをえならぬ心そふにほひにこそいかてかこのかけをはたちはなるへきとわりなくいてかてにおほしやすらひたり山きはよりさしいつる日のはなやかなるにさしあ

ひめもかゝやく心ちする御さまのこよくねひくはゝり給へる御けはひなとを
めつらしくほとへてもみたてまつるはましてよのつねならすおほゆれはさるか
たにてもなとかみたてまつりすくし給はさらむ御宮つかへにもかきりありてき
はことにはなれ給事もなかりしをこ宮のよろつに心をつくしたまひよからぬ世
のさはきにかかるゝしき御名さへひゝきてやみにしよなと思いてらるなこりお
ほくのこりぬらん御物かたりのとちめはけにのこりあらせまほしきわさなめる
を御身を心にえまかせ給ましくこゝらの人めもいとおそろしくつゝましかれば
やうゝさしあかり行に心あはたゝしくてらうのくに御車さしよせたる人ゝも
しのひてこはつくりきこゆ人めしてかのさきかゝりたるはなひとえたおらせ給
へり

しつみしもわすれぬものをこりすまに身もなけつへきやとの藤なみいとい
たくおほしわつらひてより給へるを心くるしうみたてまつる女君もいまさら
にいとつゝましくさまゝに思みたれ給へるに花のかけは猶なつかしくて
身をなけんふちもまことのふちならてかけしやさらにこりすまの浪いとわ
かやかなる御ふるまひを心なからもゆるさぬことにおほしなからせきもりのか
たからめたゆみにやいとよくかたらひをきていて給そのかみも人よりこよなく
心とゝめて思ふ給へりし御心さしなからはつかにてやみにし御なからひにはい
かてかはあはれもすくなからむいみしくしのひいり給へるおほんねくたれのさ
まをまちうけて女君さはかりならむと心え給へれとおほめかしくもてなしてお
はす中ゝうちふすへなとし給へらむよりも心くるしくなとかくしもみはなち
給つらむとおほさるれはありしよりけにふかき契をのみなかけ世をかけてきこ
え給かんの君の御事又もらすへきならねといにしへのこともしり給へればまほ
にはあらねともものこしにはつかなりつるたいめなんのこりある心ちするいかて
人めとかめあるましくもてかくしていまひとかたらひきこえ給うちわ
らひていまめかしくもなりかへる御ありさまかなむかしをいまにあらためくは
へ給ほとなかそらなる身のためくるしくとてさすかに涙くみ給へるまみのいと
らうたけにみゆるにかう心やすからぬ御けしきこそくるしけれどゝおひらかに
ひきつみなとしてをしへ給へたてあるへくもならはしきこえぬをおもはずに
こそなりにける御心なれとてよろつに御心とり給程になに事もえのこし給はす
なりぬめり宮の御方にもとみにえわたりたまはすこしらへきこえつゝおはしま
すひめ宮はなにともおほしたらぬを御うしろみともそやすからすきこえけるわ
つらはしうなとみえ給けしきならはそなたもまして心くるしかるへきをおいら

かにうつくしきもてあそひくさに思きこえ給へりきりつほの御方はうちはええ
まかてたまはす御いとまのありかたければ心やすくならひ給へるわかき御心に
いとくるしくのおおほしたり夏ころなやましくし給をとみにもゆるしきこえた
まはねはいとわりなしとおほすめつらしきさまの御こゝちにそありけるまい
とあえかなるおほむほどにいとゆゝしくそたれもくおほすらむかしからうし
てまかて給へりひめ宮のおはしますおとゝのひんかしおもてに御方はしつらひ
たりあかしの御かたいまは御身にそひていていり給もあらまほしき御すくせな
りかしたいのうへこなたにわたりてたいめし給ついてにひめ宮にもなかのとあ
けてきこえんかねてよりもさやうに思しかとついてなきにはつゝましきをかゝ
るおりにきこえなれなは心やすくなんあるへきとおとゝにきこえ給へはうちゑ
みて思やうなるへき御かたらひにこそはあなれいとをさなけにものし給めるを
うしろやすくをしへなし給へかしとゆるしきこえ給宮よりもあかしの君のはつ
かしけにてましらむをおほせは御くしすましひきつくるひておはするたくひあ
らしとみえ給へりおとゝは宮の御方にわたり給てゆふかたかのたいに侍人のし
けいさにたいめんせんとていてたつそのついでにちかつききこえさせまほしけ
に物ずめるをゆるしてかたらひ給へ心などとはいとよき人なりまたわかくしく
て御あそひかたきにもつきなからすななときこえ給はつかしうこそはあらめ
なにことをかきこえんとおひらかにの給人のいらへはことにしたかひてこそは
おほしいてめへたてをきてもてなし給そとこまかにをしへきこえ給御なかうる
はしくてすくし給へとおほすあまりになに心もなき御ありさまをみあらはされ
んもはつかしくあちきなれとさのたまはんを心へたてんもあいなしとおほす
なりけりたいたいはかくいてたちなどし給ものからわれよりかみの人やはあるへ
き身のほとなるものはかなきさまをみえをきたてまつりたるはかりこそあらめ
なと思つゝけられてうちなかめ給てならひなとするにもをのつからふことも
ものおもはしきすちにのみかゝるゝをさらは我身には思ふことありけりと身な
からそおほししらるゝ院わたり給て宮女御の君などのおほんさまともをうつく
しうもおはするかなとさまくみたてまつり給へる御めうつしにはとしころめ
なれ給へる人のおほろけならむかいとかくおとろかるへきにもあらぬを猶たく
ひなくこそはとみ給ありかたき事なりかしあるへきかきりけたかうはつかしけ
にとゝのひたるにそひてはなやかにいまめかしくにほひなまめきたるさまく
のかほりもとよりあつめゝてたきさかりにみえ給ふこそよりことしはまさりきの
ふよりけふはめつらしくつねにめなれぬさまのし給へるをいかてかくしもあり

けんとおほすうちとけたりつる御てならひをすゝりのしたにさしいれ給へれと
みつけ給ひてひきかへしみ給てなどのいとわさとも上手とみえてらうくしく
うつくしけにかき給へり

身にちかく秋やきぬらんみるまゝにあを葉の山もうつろひにけりとある所
にめとゝめ給て

水鳥のあをははいろもかはらぬを萩のしたこそけしきことなれなとかきそ

へつゝすさひ給ことにふれて心くるしき御けしきのしたにはをのつからもりつゝ
みゆるをことなくけち給へるもありかたくあはれにおほさるこよひはいつか
たにも御いとまありぬへければかのしのひ所にいとわりなくていて給にけりい
とあるましきことといみしくおほしかへすにもかなはさりけり東宮の御方はし
ちのはゝ君よりもこの御かたをはむつまじき物にたのみきこえ給へりいとうつ
くしけにをとなひまさり給へるを思へたてすかなしとみたてまつり給御ものか
たりなといとなつかしくきこえかはし給てなかのとあけて宮にもたいめし給へ
りいとをさなけにのみみえ給へは心やすくておとなくしくおやめきたるさま
にむかしの御すちをもたつねきこえ給ふ中納言のめのとゝいふめしいてゝおな
しかさしをたつねきこゆれはかたしけなけれとわかぬさまにきこえさすれとつ
いてなくて侍つるをいまよりはうとからすあなたなどにもゝのし給てをこたら
むことはおとろかしなともものし給はんなんうれしかるへきなどのたまへはた
のもしき御かけともにさまゝにをくれきこえ給て心ほそけにおはしますめる
をかうる御ゆるしのはへめれはますことなくなんおもふ給へられけるそむき給
にしうへの御心むけもたゝかくなん御心へたてきこえ給はすまたいはけなき御
ありさまをもはくゝみたてまつらせ給へくそはへめりしうちうちにもさなんだ
のみきこえさせ給しなときこゆいとかたしけなかりし御せうそこのゝちはいか
てとのみ思侍れとなに事につけても数ならぬ身なむくちおしかりけるとやすら
かにをとなひたるけはひにて宮にも御心につき給へくゑなどの事ひいなのですて
かたきさまわかやかにきこえ給へはけにいとわかく心よけなる人かなとをさな
き御心ちにはうちとけ給へりさてのちはつねに御ふみかよひなどとしておかしき
あそひわさなどにつけてもうとからすきこえかはし給世の中の人もあいなうか
はかりになりぬるあたりの事はいひあつかふものなれはゝしめつかたはたいの
うへいかにおほすらむ御おほえいとこのとしころのやうにはおはせしすこしは
をとりなんなといひけるをいますこしふかき御心さしかくてしもまさるさまな
るをそれにつけても又やすからすいふ人ゝあるにかくにくけなくさへきこえか

はし給へはことなをりてめやすくなむありける神な月にたいのうへ院の御賀に
さかのゝみたうにて薬師ほとけくやうしたてまつり給いかめしきことはせちに
いさめ申給へはしのひやかにとおほしをきてたりほとけ経はこちすのとゝのへ
まことのこくらく思やらるさいそわう経こんかうはむにや寿命経なといとゆた
けき御いのりなりかんたちめいとおほくまいり給へり御たうのさまおもしろく
いはむかたなくもみちのかけわけ行野へのほとよりはしめて見物なるにかたへ
はきほひあつまり給なるへししもかれわたれる野はらのまゝにむまくるまの行
ちかふをとしけくひゝきたり御すきやうわれもくゝと御かたくゝいかめしくせ
させ給ふ廿三日を御としみの日にてこの院はかくすきまなくつとひ給へるうち
に我御わたくしのとのおほす二条院にてその御まうけさせ給御さうそくを
はしめおほかたの御事ともゝみなこなたにのみし給御かたくゝもさるへき事と
もわけつゝのそみつかうまつり給たいともは人のつほねくゝにしたるをはらひ
て殿上人諸大夫院司しも人までのまうけいかめしくせさせ給へりしん殿のはな
ちいてをれいのしつらひにてらてんのいしたてたりおとゝのにしのまに御その
つくゑ十二たてゝ夏冬の御よそひ御ふすまなとれいのことくむらさきのあやの
おほいともうるはしくみえわたりてうちの心はあらはならす御前にをきものゝ
つくゑふたつからの地のすそこのおほゐしたりかさしのたいはちんのくゑそく
こかねのとりしろかねの枝にゐたる心はえなとしけいさの御あつかりにてあか
しの御方のせさせ給へるゆへふかく心ことなりうしろの御屏風四帖は式部卿宮
なむせさせ給けるいみしくつくしてれいの四季のゑなれとめつらしきせんすい
たんなとめなれすおもしろし北のかへにそへてをき物のみつしふたよろひたて
ゝ御てうとゝもれいのことなりみなみのひさしにかむたちめ左右の大臣式部卿
宮をはしめたてまつりてつきくゝはましてまいり給はぬ人なしふたいの左右に
楽人のひらはりうちてにしひんかしにとんしき八十くろくのからひつ四十つら
つゝけてたてたりひつしの時はかりに楽人まいる万歳楽皇上などまいて日くれ
かゝるほとにこまのらんしやうしてらくそんまいゝてたるほど猶つねのめなれ
ぬ舞のさまなれはまひはつる程に権中納言衛門督おりていりあやをほのかにま
ひて紅葉のかけに入ぬるなこりあかすけうありと人々おほしたりいにしへの朱
雀院の行幸に青海波のいみしかりしゆふへ思いて給人々は権中納言衛門督又お
とらすたちつゝき給にけるよゝのおほえ有さまかたちよいなどもおさくゝを
とらすつかさくらゐはやゝすすみてさへこそなとよはひの程をもかそへてなを
さるへきにてむかしよりかくたちつゝきたる御なからひなりけりとめてたくお

もふあるしの院もあはれに涙くましくおほいてらるゝ事ともおほかり夜に
りて楽人ともまかりいつ北のまん所の別富とも人々ひきいてろくのからひつに
よりて一つゝとりてつきつきたまふしろき物ともをしなしかつきて山きはよ
りいけのつゝみするほどのよそめはちとせをかねてあそふつるのけころもに
思まかへらる御あそひはしまりて又いとおもしろし御ことゝもは春宮よりそと
ゝのへさせ給ける朱雀院よりわたりまいれるひはきん内よりたまはり給へるさ
うの御ことなどみなむかしおほえたるものゝねともにてめつらしくかきあはせ
給へるになにのをりにもすきにしかたの御ありさまうちわたりなとおほしいて
らる故入道の宮おはせましかはかゝる御賀などわれこそすゝみつかうまつらま
しかなに事につけてかは心さしもみえたてまつりけんとあかすくちおしくのみ
思いてきこえ給ふ内にもこ宮のおはしまさぬことをなにことにもはえなくさう
くくしくおほさるゝにこの院の御ことをたにれいのあるさまのかしこまり
をつくしてもえみせたてまつらぬをよとゝもにあかぬ心地し給もことしは此御
賀にことつけてみゆきなどもあるへくおほしをきてけれと世中のわつらひなら
むことさらにせさせ給ましくなんといひ申給ことたひくになりぬれはくち
おしくおほしとまりぬしはすの廿日あまりの程に中宮まかてさせ給てことしの
ゝこりの御いのりにならの京の七大寺に御す行のぬの四千たんこのちかきみや
この四十寺にきぬ四百疋をわかつてせさせ給ありかたき御はくゝみをおほしし
りなからなに事につけてかはふかき御心さしをもあらはし御覽せさせ給はんと
てちゝ宮はゝみやす所のおはせまし御ための心さしをもとりそへおほすにかく
あなちにおほやけにもきこえかへさせ給へは事ともおほくとゝめさせ給つ四
十の賀といふことはさきくゝをきゝ侍にものこりのよはひひさしきためしなん
すくなかりけるをこのたひは猶世のひゝきとゝめさせ給てまことにのちにたら
ん事をかそへさせ給へとありけれとおほやけさまにて猶いとかめしくなんあ
りける宮のおはしますまのしんでんに御しつらひなとしてさきくゝにことか
はらすかむたちのろくなと大きやうになすらへて御子たちにはことに女のさ
うそく非参議の四位まうちきんたちなとたゝの殿上人にはしろきほそなかひと
かさねこししなとまでつきくゝに給ふさうそくかきりなくきよらをつくして
名たかきおひ御はかしなと故前坊の御方さまにてつたはりまいりたるも又あは
れになんふるきよの一の物と名あるかきりはみなつとひまいる御賀になんあめ
るむかし物かたりにもものえさせたるをかしこきことにはかそへつゝけためれ
といとうるさくてこちたき御なからひのことゝもはえそかそへあえはへらぬや

内にはおほしそめてしことゝもをむけにやはとて中納言にそつけさせ給てける
そのころの右大将やまゐりしてしし給けるをこの中納言に御賀の程よろこひくは
へんとおほしめしてにはかになさせ給つ院もよろこひきこえさせ給ふものから
いとかくにはかにあまるよろこひをなむいちはやき心ちし侍とひけし申給うし
とらのまちに御しつらひまうけ給てかくろへたるやうにしなし給へれとけふは
なをはたことにきしまさりて所々のきやうなともくらつかさこくさう院より
つかうまつらせ給へりとんしきなどおほやけさまにて頭中将せむしうけ給てみ
こたち五人左右おとゝ大納言ふたり中納言三人宰相五人殿上人はれいの内東宮
院のこるすくなしおまし御てうとゝもなとはおほきおとゝくはしくうけ給はり
てつかうまつらせ給へりけふはおほせ事ありてわたりまいり給へり院もいと
しかくおとろき申給て御座につき給ぬもやの御座にむかへておとゝの御座あり
いときよらにもものくしくふとりてこのおとゝそいまさかりのしうとくとほみ
え給へるあるしの院は猶いとわかき源氏の君にみえ給御ひやう風四帖にうちの
御てかゝせ給へるからのあやのうすたんにしたゑのさまなおろかならむやは
おもしろき春秋のつくりゑなとよりもこの御屏風のすみつきのかゝやくさまは
めもをよはす思なしさへめてたくなむありけるをきものゝみつしひきものふき
ものなど蔵人所よりたまはり給へり大将の御いきをひもいとかめしくなりた
まひにたれはうちそへてけふのさほういとなり御むま四十疋左右のむまつ
かさ六衛府の官人かみよりつきくゝにひきとゝのふるほとひくれはてぬれいの
万さい樂賀王恩なといふまひけしきはかりまひておとゝのわたり給へるにめつ
らしくもてはやし給へる御あそひにみな人心をいれ給へりひはゝれいの兵部卿
宮なにことに世にかたき物の上すにおはしていとなしおまへにきんの御こ
とおとゝわこんひき給としころそひ給にける御みゝのきゝなしにやいというに
あはれにおほさるればきんも御ておさくゝかくしたまはすいみしきねともいつ
むかしの御ものかたりともなといてきていまはたかゝる御なからひにいつかた
につけてもきこえかよひ給へき御むつひなと心よくきこえ給て御みきあまたた
ひまいりて物のおもしろさもとゝこほりなく御ゑいなきともえとゝめ給はす御
をくり物にすぐれたるわこんひとつこのみ給こまふえそへてしたんのはこひと
よろひからの本ともこゝのさうの本なといれて御くるまにをひてたてまつれ
給御馬ともむかへとりて右つかさともこまのかくしてのゝしるろくゑふの官人
のろくとも大将給ふ御心とそき給ていかめしきことゝもはこのたひとゝめ給へ
れと内東宮一院きさいの宮つきつきの御ゆかりいつくしきほといひしらすみえ

にたることなれば猶かゝるおりにはめてたくなんおほえける大将のたゝひとゝ
ころおはするをさうくしくはえなき心ちせしかとあまたの人にすくれおほえ
ことに人からもかたはらなきやうにものし給にもかのはゝ北の方の伊勢の宮す
所とのうらみふかくいとみかはし給けんほと御すくせともの行すゑみえたる
なむさまくなりけるその日の御さうそくともなとこなたのうへなむし給ける
ろくともおほかたの事をそ三条の北の方はいそき給めりしおりふしにつけたる
御いとなみうちくの物のきよらをもこなたにはたゝよその事にのみきゝわた
り給をなに事につけてかはかゝるものくしきかすにもましらひ給はましとお
ほえたるを大将の君の御ゆかりにいとよくかすまへられ給へりとしかへりぬき
りつほの御方ちかつきたまいぬるにより正月朔日より御すほうふたんにせさせ
給てらくやしろくの御いのりはたかすもしらすおとゝの君ゆゝしきことを
み給へてしかはかゝるほどの事はいとおそろしき物におほしゝみたるをたいの
うへなどのさることし給はぬはくちおしくさうくしき物からうれしくおほさ
るゝにまたいとあえかなる御ほとにいかにおはせんとかねておほしさはくに二
月ばかりよりあやしく御けしきかはりてなやみ給に御心ともさはくへしおんや
うしともゝ所をかへてつゝしみ給ふへく申ければほかのさはなれたらむはお
ほつかなしとてかのおかしの御まちなかのたいにわたしたてまつり給ふこな
たはたゝおほきなるたいふたつらうともなむめぐりてありけるに御すほうのた
んひまなくぬりていみしきけんさともつとひてのゝしるはゝ君此時に我御すく
せもみゆへきわさなめれはいみしき心をつくし給かのおほあま君もいまはこよ
なきほけ人にてそありけむかしこの御ありさまをみたてまつるはゆめの心ちし
ていつしかとまいりちかつきなれたてまつるところはゝ君はかうそひさふら
ひ給へとむかしのことなとまほにしもきこえしらせ給はさりけるをこのあま君
よろこひにえたへてまいりてはいと涙かちにふるめかしき事ともをわなゝきい
てつゝかたりきこゆはしめつかたはあやしくむつかしき人かなどうちまほり給
しかとかゝるひとありとはかりはほのきゝをき給へれはなつかしくもてなし給
へりむまれ給し程の事おとゝの君のかのうらにおはしましたりしありさまいま
はとて京へのほり給しにたれも心をまとはしていまはかきりかはかりの契にこ
そはありけれとなけしをわか君のかくひきたすけ給へる御すくせのいみしく
かなしきことゝほろくとなけはけにあはれなりけるむかしの事をかくきかせ
さらましはおほつかなくともすきぬへかりけりとおほしてうちなき給心のう
ちには我身はけにうけはりていみしかるへきゝはにはあらさりけるをたいのう

への御もてなしにみかゝれて人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり
人をはまたなき物に思けちこよなき心おこりをはしつれ世の人はしたにいひい
つるやうもありつらむかしなとおほししりはてぬは、君をはもとよりかくすこ
しおほえくたれるすちとしりなからむまれ給けん程などをはさる世はなれたる
さかひにてなともしり給はさりけりいとあまりおほとき給へるけにこそはあや
しくおほくしかりけることなりやかの入道のいまは仙人の世にもすまぬやう
にてゐたなるをき、給も心くるしくなとかたくゝに思みたれ給ぬいものあは
れになかめておはするに御方まいり給て日中の御かちにこなたかなたよりまい
りつとひ物さはかしくのゝしるに御まへにこと人もさふらはすあま君ところえ
ていとちかくさふらひ給あなみくるしやみしかき御木丁ひきよせてこそさふら
ひ給はめ風などさはかしくてをのつからほころひのひまもあらむにくすしなと
やうのさましていとさかりすぎ給へりやなとなまかたはらいたく思給へりよし
めきそしてふるまふはおほゆめれとももうゝにみゝもおほくしかりければ
あゝとかたふきてゐたりさまはいとさいふはかりにもあらずかし六十五六の程
なりあますかたいとかはらかにあてなるさましてめつやゝかになきはれたるけ
しきのあやしくむかし思いてたるさまなればむねうちつふれてこたいのひか事
ともや侍つらむよくこのよのほかなるやうなるひかおほえともにとりませつゝ
あやしきむかしの事ともゝいてまうてきつらんはやゆめのこゝちこそし侍れと
うちほゝえみてみたてまつり給へはいとなまめかしくきよらにてれいよりもい
たくしつまり物おほしたるさまにみえ給我こともおほえたまはすかたしけなき
にいとおしき事ともをきこえ給ておほしみたるゝにやいまはかはかりと御くら
ゐをきはめ給はんよにきこえもしらせんところおもへくちおしくおほしすつへ
きにはあらねといとくおしく心をとりし給らんとおほゆ御かちはてゝまかて
ぬるに御くた物なとちかくまかなひなしこれはかりをたにといと心くるしけに
思てきこえ給あま君はいとめてたうゝつくしうみたてまつるまゝにも涙はえと
ゝめすかほはえみてくちつきなどはみくるしくひろこりたれとまみのわたりう
ちしくてひそみゐたりあなかたはらいたとめくはすれときゝもいれす
おいのなみかひあるうらにたちいてゝしほたるゝあまをたれかとかめむむ
かしの世にもかやうなるふる人はつみゆるされてなん侍けるときこゆ御すゝり
なるかみに

しほたるゝあまを浪路のしるへにてたつねもみはやはまのとまやを御かた
もえしのひ給はてうちなき給ぬ

よをすてゝあかしのうらにすむ人も心のやみはゝるけしもせしなときこえ

まきらはし給わかれけんあか月のことも夢の中におほしいてられぬをくちおしくもありけるかなとおほすやよひの十よ日の程にたいらかにむまれ給ぬかねてはおとろくしくおほしさはきしかといたくなやみ給事なくておとこみこさへおはすれはかきりなくおほすさまにておとゝも御心おちる給ぬこなたはかくれのかたにてたゝけちかき程なるにいかめしき御うふやしなひなどのうちしきりひゝきよそをしき有さまけにかひあるうらとあま君のためにはみえたれときしきなきやうなれはわたり給なむとすたいのうへもわたり給へりしろき御さうそくし給て人のおやめきてわか宮をつといたきてゐる給へるさまいとおかし身つからかゝることしり給はす人のうへにてもみならひ給はねはいとめつらかにうつくしと思きこえ給へりむつかしけにおはする程をたえすいたきとり給へはまことのをは君はたゝまかせたてまつりて御ゆ殿のあつかひなとをつかうまつり給春宮の宣旨なる内侍のすけそつかうまつる御むかへゆにおりたち給へるもいとあはれにうちくゝの事もほのしりたるにすこしかたほならはいとおしからましをあさましくけたかくけにかゝる契ことにものし給ける人かなとみきこゆこの程のきしきなどもまねひたてんにいとさらなりや六日といふにれいのおとゝにわたり給ぬ七日の夜内よりも御うふやしなひの事あり朱雀院のかく世をすておはします御かはりにや蔵人所より頭弁宣旨うけ給はりてめつらかなるさまにつかうまつれりろくのきぬなと又中宮の御方よりもおほやけことにはたちまさりいかめしくせさせ給つきくゝの御子たち大臣のいゑくゝそのころのいとなみにてわれもくゝときよらをつくしてつかうまつり給おとゝの君もこのほどの事ともはれいのやうにもことそかせ給はて世になくひゝきこちたき程にうちくゝのなまめかくくこまかなる宮ひのまねひつたふへきふしはめもとまらすなりにけりおとゝの君もわか宮をほとなくいたきたてまつり給ひて大将のあまたまうけたなるをいまゝてみせぬかうらめしきにかくらうたき人をそえたてまつりたるとうつくしみきこえ給ふことはりなりやひゝにものをひきのふるやうにおよすけ給御めのとなと心しらぬはとみにめさてさふらふ中にしな心すくれたるかきりをえりてつかうまつらせ給御かたの御心をきてのらうくしくけたかくおほとかなる物のさるへきかたにはひけしてにくらかにもうけはらぬなどをほめぬ人なしたいのうへはまほならねとみえかはし給てさはかりゆるしなくおほしたりしかといまは宮の御とくにいとむつましくやむことなくおほしなりになりちこうつくしみし給御心にてあまかつなと御てつからつくりそゝくりおはすも

いとわか／＼しあけくれこの御かしつきにてすくし給かのこたいのあま君はわか宮をえ心のとかにみたてまつらぬなんあかすおほえける中／＼みたてまつりそめてこひきこゆるにそいのちもえたふましかめるかのあかしにもかゝる御ことつたへきゝてさるひしり心ちにもいとうれしくおほえければいまなんこの世のさかいを心やすくゆきはなるへきと弟子ともにいひてこのいへをはてらになしあたりの田などのやうの物はみなその寺の事にしをきてこの国のおくのこほりに人もかよひかたくふかきやまあるをとしころもしめをきながらあしこにこりなむのち又人にはみえしらるへきにもあらずと思てたゝすこしのおほつかなき事のこりければいまゝてなからへけるをいまはさりともしとけ神をたのみ申てなむうつろひけるこのちかきとしころとなりては京にことなる事ならて人もかよはしたてまつらさりつこれよりくたし給人はかりにつけてなむひとくたりにてもあま君さるへきおりふしの事もかよひける思ひはなるゝよのとちめにふみかきて御かたにたてまつれ給へりこのとしころはおなし世中のうちにめくらひ侍りつれとなにかはかくなから身をかへたるやうに思給へなしつゝさせることなきかきりはきこえうけ給はらすかなふみゝたまふるはめのいとまいりて念仏もけたいするやうにやくなうてなん御せうそもたてまつらぬをつてにうけたまはればわか君は春宮にまいり給ておとこ宮むまれ給へるよしをなむふかくよろこひ申侍るそのゆへは身つからかくつたなき山ふしの身にいまさらにこのよのさかえを思にも侍らすすきにしかたのとしころ心きたなく六時のつとめにもたゝ御ことを心にかけてはちすのうへのつゆのねかひをはさしをきてなむねんしたてまつりしわかおもとむまれ給はんとせしそのとしの二月のその夜のゆめにみしやう身つからすみの山を右のてにさゝけたり山の左右より月日のひかりさやかにさしいてゝよをてらす身つからは山のしものかけにかくれてその光にあたらす山をはひろき海にうかへをきてちいさき舟にのりてにしかたをさしてこき行となんみ侍し夢さめてあしたよりかすならぬ身にたのむところいてきながらなに事につけてかさるいかめしきことをはまちいてむと心のうちに思ひはへしをそのころよりはらまれ給にしこなたそくのかたのふみをみ侍しにも又内教の心をたつぬる中にも夢をしんすへきことおほく侍しかはいやしきふところのうちにもかたしけなくおもひいたつきたてまつりしかとちからをよはぬ身におもふ給へかねてなむかゝるみちにおもむき侍にしまたこの国のことにしつみ侍て老のなみにさらにたちかへらしと思ひとちめてこのうらにとしころ侍しほともわか君をたのむことに思きこえ侍しかはなむ心ひとつにおほくの

願をたてはへりしそのかへり申たいらかに思のこと時にあひ給わか君くには
ゝとなり給てねかひみち給はんよにすみよしのみやしろをはしめはたし申給へ
さらになにことをかはうたかひ侍らむこのひとつの思ひちかき世にかなひ侍り
ぬれははるかにゝしのかた十萬億の国へたてたる九品のうへのゝそみうたかひ
なくなり侍りぬれはいまはたゝむかふるはちすをまちはへるほどそのゆふへま
て水草きよき山のすゑにてつとめ侍らむとてなむまかりいりぬる

ひかりいてんあか月ちかくなりにつりいまそみしよの夢かたりするとて月

日かきたりいのちをはらむ月日もさらになしろしめしそいにしへより人のそめ
をきける藤衣にもなにかやつれ給はんたゝ我身はへん化の物とおほしなして老
法師のためには功德をつくり給へこのよのたのしみにそへてもののちのよをわす
れ給ふなねかひ侍る所にたにいたり侍なはかならず又たいめんは侍りなむさは
のほかのきしにいたりてとくあひみんとをおほせてかのやしろにたてあつめ
たる願ふみともをおほきなるちんのふはこにふむしこめてたてまつりたまへり
あま君にはことゝにもかゝすたゝこの月の十四日になむ草のいほりまかりは
なれてふかき山にいり侍りぬるかひなき身をはくまおほかみにも施し侍なんそ
こには猶思しやうなる御よをまちいて給へあきらかなる所にて又たいめんはあ
りなむとのみありあま君このふみをみてかのつかひの大とこにとへはこの御文
かき給て三日といふになむかのたえたるみねにうつろひ給にしなにかしらもか
の御をくりにふもとまてはさふらひしかみなかへし給て僧一人わらは二人なん
御ともにさふらはせ給いまはとよをそむき給しおりをかなしきとちめと思給へ
しかとのこり侍けりとしころをこなひのひまゝによりふしなからかきならし
給しきんの御ことひはとりよせ給てかいしらへ給つゝほとけにまかり申し給て
なんみたうに施入し給しさらぬ物ともゝおほくはたてまつり給てそのゝこりを
なん御弟子とも六十余人なんしたしきかきりさふらひけるほとにつけてみな処
分し給て猶しのこりをなん京の御れうとてをくりたてまつり給へるいまはとて
かきこもりさるはるけき山の雲かすみにましり給にしむなしき御あとにとまり
てかなしひおもふ人ゝなんおほく侍るなどこのたいとこもわらはにて京よりく
たりけるふる人の老法しになりてとまれるいとあはれに心ほそしと思へりほと
けの御弟子のさかしきひしりたにわしのみねをはたとゝしからすたのみきこ
えなから猶たき木つきける夜のまとひはふかゝりけるをましてあま君のかなし
と思給へることかきりなし御方はみなみのおとゝにおはするをかゝる御せうそ
こなんあるとありければしのひてわたり給へりをもゝしく身をもてなしてお

ほろけならてはかよひあひみ給こともかたきをあはれる事なるとき、ておほ
つかなければうちのひてもものし給へるにいとみしくかなしけなるけしきに
てゐ給へり火ちかくとりよせて此ふみをみ給にけにせきとめんかたそなかりけ
るよの人はなにとめと、むましきことのまつむかししかたの事思いてこひ
しと思わたり給心にはあひみてすきはてぬるにこそはとみ給にいみしくいふか
ひなし涙をえせきとめすこの御ゆめかたりをかつは行さきたのもしくはひか
心にて我身をさしもあるましきさまにあくからし給となかこゝろ思た、よはれし
ことはかくはかなき夢にたのみをかけて心たかくものし給なりけりとかつく
思あはせ給あまきみひさしくためらひて君の御とくにはうれしくをもた、しき
ことをも身にあまりてならひなく思侍りあはれにいふせき思ひもすくれてこそ
侍けれかすならぬかたにてもなからへし都をすて、かしこにしつみるしをたに
よ人にたかひたるすくせにもあるかなと思ひはへしかといけるよにゆきはなれ
へたたるへき中の契とは思かけすおなしはちすにすむへきのちのよのたのみを
さへかけてとし月をすくしきてにはかにかくおほえぬ御こといきてきてそむきに
し世にたちかへりてはへるかひある御事をみたてまつりよろこぶものからかた
つかたにはおほつかなくかなしきことのうちそひてたえぬをつゐにかくあひみ
すへたてなからこのよをわかれぬるなんくちおしくおほえはへる世にへし時た
に人ににぬ心はえによりよをもてひかむるやうなりしをわかきとちたのみなら
ひてをのくは又なく契をきてければかたみにいとふかくこそたのみ侍しかい
かなれはかくみ、にちかき程なからかくてわかれぬらんといひつ、けていとあ
はれにうちひそみ給御方もいみしくなきて人にすくれん行さきのこともおほえ
すやかすならぬ身にはなに事もけさやかにかひあるへきにもあらぬものからあ
はれなるありさまにおほつかなくてやみなむのみこそくちおしけれよろつの事
さるへき人の御ためとこそおほえはへれさてたえこもり給なは世中もさためな
きにやかてきえ給なはかひなくなるとてもすからあはれる事ともをいひつ
、あかし給きのふもおと、の君のあなたにありとみをき給てしをにはかにはひ
かくれたらむもかろくしきやうなるへし身ひとつはなにはかりも思は、かり
侍らすかくそひ給御ためなどのいとおしきになむ心にかかせて身をもてなし
にくかるへきとてあか月にかへりわたり給ぬわか宮はいか、おはしますいかで
かみたてまつるへきとてなきぬいまみたてまつり給てん女御の君もいとあま
れになむおほしいてつ、もし世中思ふやうならはゆ、しきかねことなれとあま
君その程までなからへ給はなんとの給ふめりきいかにおほすことにかあらむと

の給へは又うちゑみていてやされはこそさま／＼ためしなきすくせにこそ侍れ
とてよろこふこのふはこはもたせてまうのほり給ぬ宮よりとくまいり給へきよ
しのみあれはかくおほしたることはなりめつらしきことさへそひていかに心
もたなくおほさるらむとむらさきのうへもの給てわか宮しのひてまいらせたて
まつらむ御心つかひし賜みやす所はおほんいとまの心やすからぬにこり給てか
ゝるついでにしはしらまほしくおほしたり程なき御身にさるおそろしきこと
をし給へれはすこしおもやせほそりていみしくなまめかしき御さまし給へりか
くためらひかたくおはするほとつころひ給てこそはなど御かたなとは心くるし
かりきこえ給をおとゝはかやうにおもやせてみえたてまつり給はむも中／＼あ
はれなるへきわさなりなどの給たいのうへなどのわたり給ぬる夕つかたしめや
かなるに御かたおまへにまいり給てこのふはこきこえしらせ給おもふさまにか
なひはてさせ給まではとりかくしてきて侍へけれと世中さためかたければう
しろめたさになんなに事をも御心とおほしかすまへさらむこなたともかくもは
かなくなり侍なはかならずしもいまはのとちめを御らむせらるへき身にも侍ら
ねは猶うつし心うせすはへるよになむはかなき事をもきこえさせをくへく侍け
ると思ひ侍てむつかしくあやしきあとなれとこれも御らんせよこの願ふみはち
かきみつしなどにをかせ給てかならすさるへからむおりに御らむしてこのうち
のことゝもはせさせ給へうとき人にはなもらさせ給そかはかりとみたてまつり
をきつれば身つからもよをそむき侍なんとおもふ給へなりゆけはよろつ心のと
かにもおほえはへらすたいのうへの御こゝろをろかに思きこえさせ給ないとか
りかたくものし給ふかき御けしきをみはへれは身にはこよなくまさりてなかき
御よにもあらなんとそ思はへるもとより御身にそひきこえさせんにつけてもつ
ゝましきみの程に侍れはゆつりきこえそめ侍にしをいとかうしも物し給はしと
なんとしころは猶よのつねにおもふ給へわたり侍つるいまはきしかた行ききう
しろやすく思なりにて侍りなといとおほくきこえ給涙くみてきゝおはすかくむ
つましかるへきおまへにもつねにうちとけぬさまし給てわりなくものつゝみし
たるさまなりこのふみのことはいとうたてこはくにくけなるさまをみちのくに
かみにてとしへにければきはみあつこえたる五六枚さすかにかうにいとふかく
しみたるにかき給へりいとあはれとおほして御ひたいかみのやう／＼ぬれゆく
御そはめあてになまめかし院はひめ宮の御かたにおはしけるをなかのみさうし
よりふとわたり給へれはえしもひきかくさて御きちやうをすこしひきよせて身
つからはたかくれ給へりわか宮はおとろき給へりやよきのまもこひしきわさ

なりけりときこえ給へはみやす所はいらへもきこえ給はねは御方たいにわたし
きこえ給へときこえ給いとあやしやあなたにこの宮をらうし奉りてふところを
さらにはなたすもてあつかひつゝ人やりならすきぬもみなぬらしてぬきかへか
ちなめるかるくしくなとかくわたしたてまつり給こなたにわたりてこそみた
てまつり給はめとの給へはいとうたて思くまなき御ことかな女におはしまさむ
にたにあなたにてみたてまつり給はんこそよく侍らめましておとこはかきりな
しときこえさすれと心やすくおほえ給をたはふれにてもかやうにへたてかまし
き事なさかしかりきこえさせ給ひそときこえ給うちわらひて御なかともにかま
せてみはなちきこゆへきなりなへたてゝいまはたれもくさしはなちさかし
らなどの給こそをさなければまつはかやうにはひかくれてつれなくいひおとし給
めりかしとて御木丁をひきやり給へはもやのはしらによりかゝりていときよ
けに心はつかしけなるさまして物し給ありつるはこもまとひかくさんもさまあ
しければさておはするをなそのはこふかき心あらむけさう人のなかうたよみて
ふんしこめたる心ちこそすれとの給へはあなうたてやいまめかしくなりかへら
せ給める御心ならひにきゝしらぬやうなる御すさひ事ともこそ時々いてくれと
てほゝゑみ給へれと物あはれなりける御けしきとしるければあやしようちか
たふき給へるさまなればわつらはしくてかのあかしのいはやよりしのひてはへ
し御いのりの巻数又またしき願などのへりけるを御こゝろにもしませたま
つるへきおりあらは御覽しをくへくやとて侍をたゝいまはついてなくてなにか
はあけさせ給はんとときこえ給にけにあはれなるへきありさまそかしといかにを
こなひましてすみ給にたらむ命なかくてこゝらのとしころのつとむるつみもこ
よなからむかし世の中によしありさかしきかたゝのひととてみるにもこの世に
そみたる程のにこりふかきにやあらむかしこきかたこそあれいとかきりありつ
ゝをよはさりけりやさもいたりふかくさすかにけしきありし人のありさまかな
ひしりたちこの世はなれかほにもあらぬものからしたの心はみなあらぬ世にか
よひすみにたるとこそみえしかましていまは心くるしきほたしもなく思ひはな
れにたらむをやかやすき身ならはしのひていとあはまほしくこそとの給ふいま
はかの侍し所をもすてゝとりのねきこえぬ山にとなんきゝ侍ときこゆればさら
はそのゆいこむなりなせうそこはかよはし給やあま君いかに思給らむおやこ
の中よりもまたさるさまの契はことにこそゝふへけれとてうち涙くみ給へりと
しのつもりに世中のありさまをとかく思しり行まゝにあやしきこひしく思いて
らるゝ人のみありさまなればふかき契のなからひはいかにあはれならむなどの

給つてにこの夢かたりもおほしあはする事もやと思つていとあやしきほんしとかいふやうなるあとにはへめれと御らんしと、むへきふしもやましり侍とてなんいまはとてわかれ侍にしかと猶こそあはれはのこり侍るものなりけれとてさまよくうちなき給ていとかしこく猶ほれくしからすこそあるへけれてなともすへてなにこともわさというそくにしつへかりける人のた、このよふるかたの心をきてこそすくなかりけれかのせんそのおと、はいとかしこくありかたき心さしをつくしておほやけにつかうまつり給ける程にもの、たかひめありてそのむくひにかくすゑはなきなりなと人いふめりしを女子のかたにつけたれとかくていときなしといふへきにはあらぬもそこらのをこなひのしるしにこそはあらめなと涙おしのこひ給つ、この夢のわたりにめと、め給ふあやしくひかしくすゝろにたかき心さしありと人もとかめ又われなからもさるましきふるまひをかりにてもするかなと思しことはこの君のむまれ給し時に契ふかく思しりにしかとめのまへにみえぬあなたの事はおほつかなくこそ思わたりつれさらはかゝるたのみありてあなちにはのそみしなりけりよこさまにいみしきめをみた、よひしもこの人ひとりのためにこそありけれいかなる願をか心におこしけむとゆかしければ心のうちにおかみてとり給つこれは又くしてたてまつるへき物侍りいま又きこえしらせ侍らんと女御にはきこえ給そのついでにいまはかくいにしへのことをもととりしり給ぬれとあなたの御心はへをおろかにおほしなすなもとよりさるへきなかえさらぬむつひよりもよこさまの人のなけのあはれをもちかけひと事の心よせあるはおほろけのことにもあらすましてこゝになどさふらひなれ給をみるくもはしめの心さしかはらすふかくねんころに思きこえたるをいにしへの世のたとへにもさこそはうはへにははく、みけれとらうくしきたとりあらんとかしこきやうなれと猶あやまりても我ためしたの心ゆかみたらむ人をさも思よらすうらなからむためはひきかへしあはれにいかてかゝるにはとつみえかましきにも思なをる事もあるへしおほろけのむかしのよのあたらぬ人はたかふふしくあれとひとりくつみなき時にはをのつからもてなすためしともあるへかめりさしもあるましきことにかと、しくくせをつけあひ行なく人をもてはなる、心あるはいとうちとけかたく思くまなきわさになむあるへきおほくはあらねと人の心のとあるさまかゝるおもむきをみゆるにゆへよしといひさまく口に惜からぬきはの心はせあるへかめりみなをのくえたるかたありてとる所なくもあらねと又とりたて、我うしろみに思ひまめくしくえらひ思はんにはありかたきわさになむた、まことに心のくせなくよきこと

はこのたいをのみなむこれをそおひらかなる人といふへかりけるとなむ思はへるよしとて又あまりひたゝけてたのもしけなきもいとくちおしやはかりの給ふにかたへの人は思ひやられぬかしそこにこそすこしものゝ心えてものし給めるをいとよしむつひかはしてこの御うしろみをもおなし心にてものし給へなしのひやかにの給のたまはせねといとありかたき御けしきをみたてまつるまゝにあげくれのことくさにきこえはへるめさましきものになとおほしゆるさゝらんにかうまで御らんししるへきにもあらぬをかたはらいたきまでかすまへの給はすれはかへりてはまはゆくさへなむかすならぬ身のさすかにきえぬはよのきゝみゝもいとくるしくつゝましく思たまへらるゝをつみなきさまにもてかくされたてまつりつゝのみこそときこえ給へはその御ためにはなにの心さしかはあらむたゝこの御ありさまをうちそひてもえみたてまつらぬおほつかなさにゆつりきこえらるゝなめりそれも又とりもちてけちえんになとあらぬ御もてなしともによるつの事なのめにめやすくなれはいとなむおもひなくうれしきはかなきことにても心えすひかゝしき人はたちましらふにつけて人のためさへからきことありかしさをし所なくたれものし給めれば心やすくなむとの給につけてもさりやよくこそひけしにけれなと思つゝけ給たいへわたり給ぬさもいとやむことなき御心さしのみまさるめるかなけにはた人よりことにかくしもくし給へるありさまのことはりとみえ給へるこそめてたけれ宮の御方うはへの御かしつきのみめてたくてわたり給こともえなのめならさめるはかたしけなきわさなめりかしおなしすちにはおはすれといまひときはゝ心くるしくとしりふこちきこえ給につけても我すくせはいとたけくそおほえ給ひけるやむことなきたにおほすさまにもあらさめるよにましてたちまするへきおほえにしあらねはすへていまはうらめしきふしもなしたゝかのたえこもりにたる山すみを思やるのみそあはれにおほつかなきあま君もたゝふくちのそのにたねまきてとやうなりしひとことをうちたのみてのちのよを思やりつゝなかめ給へり大将の君はこのひめ宮の御ことを思をよはぬにしもあらさりしかはめにちかくおはしますをいとたゝにもおほえすおほかたの御かしつきにつけてこなたにはさりぬへきおりおりにまいりなれをつから御けはひありさまもみきゝ給にいとわかくおほとき給へるひとすちにてうへのきしきはいかめしく世のためしにしつばかりもてかしつきたてまつり給へれとおさゝけさやかにものふかくはみえす女房などもおとなゝしきはすくなくわかやかなるかたち人のひたふるにうちはなやきされはめるはいとおほくかすしらぬまでつとひさふらひつゝもの思ひなけなる

御あたりとはいひなからな事ものとやかに心しつめたるは心のうちのあらはにしもみえぬわさなれば身に人しれぬおもひそひたらんも又まことに心ちゆきけにとゝこほりなかるへきにしうちまされはかたへの人にひかれつゝおなしけはひもてなしになたらかなるをたゝあけくれはいはけたるあそひたはふれに心いれたるわらはへのありさまなど院はいとめにつかすみ給事ともあれとひとつさまによの中をおほしの給はぬ御本上なればかゝるかたをもまかせてさこそはあらまほしからめと御らんしゆるしつゝいましめとゝのへさせ給はすさうしみの御ありさまはかりをはいとよくをしへきこえ給にすこしもてつけ給へりかやうの事を大将の君もけにこそありかたき世なりけれむらさきの御よういけしきのこゝらのとしへぬれとゝもかくもゝりいてみえきこえたるところなくしつやかなるをもとゝしてさすかに心うつくしう人をもけたす身をもやむことなく心にくくもてなしそへ給へる事とみしおもかけもわすれかたくのみなむ思いてられける我御北のかたもあはれとおほすかたこそふかけいふかひありすぐれたるらうゝしきなとものし給はぬ人なりおたしきものにいまはとめなるゝに心ゆるひて猶かくさまゝにつとひ給へるありさまとものとりゝにおかしけを心ひとつに思はなれかたきをましてこの宮は人の御ほとを思にもかきりなくのことなる御ほとにとりわきたる御けしきにしもあらず人めのかさはかりにこそとみたてまつりしるわさとおほけなき心にしもあらねとみたてまつるおりありなむやとゆかしく思きこえ給けり衛門のかむの君も院につねにまいりしたしくさふらひなれ給し人なればこの宮をちゝみかとのかしつきあかめたてまつり給し御心をきてなとくはしくみたてまつりをきてさまゝの御さためありしころをひよりきこえより院にもめさましとはおほしの給はせずときゝしをかくことさまになり給へるはいとくちおしくむねいたき心ちすれはなをえおもひはなれすそのおりよりかたらひつきにける女房のたよりに御ありさまなともきゝつたふるをなくさめに思ふそはかなかりけるたいのうへの御けはひには猶おされ給てなんとよ人もまねひつたふるをきゝてはかたしけなくともさる物はおもはせてまつらさましけにたくひなき御身にこそあたらさらめとつねにこの小侍従といふ御ちぬしをいひはけまして世中さためなきをおとゝの君もとよりほいありておほしをきてたるかたにおもむき給はゝとたゆみなく思ありきけりやよひはかりのそらうらゝかなる日六条院に兵部卿宮衛門督などまいり給へりおとゝいて給て御物かたりなとし給しつかなるすまゐはこのころこそいとつれつれにまきるゝことなかりけれおほやけわたくしにことなしやなにわさしてか

はくらすへきなどの給てけさ大将のものしつるはいつかたにそいとさうくしきをれのこゆみいさせてみるへかりけりこのむめるわかうととも、みえつるをねたういてやしぬると、はせ給大将の君はうしとらのまちに人々あまたしてまりもてあそはしてみ給ときこしめしてみたれかはしきことのさすかにめさめてかとくしきそかしいつらこなたにとて御せうそこあはまiori給へりわきむたちめく人々おほかりけりまりもたせ給へりやたれくかものしつるとの給ふこれかれはへりつこなたへまかてんやとの給てしんでんのひんかしおもてきりつほはわか宮くしたてまつりてまいり給いにしころなれはこなたかくろへたりけりやり水などのゆきあひはれてよしあるか、りの程をたつねてたちいとおほきおほいと、君たち頭弁兵衛佐大夫の君なとすくしたるも又かたなりなるもさまく人によりまさりてのみのし給やうくくれか、るに風ふかすかしき日なりとけうして弁の君もえしつめすたちましれはおと、弁官もえおさめあへさめるをかんたちめなりともわかきゑふつかさたちはなとかみたれ給はさらむかはかりのよはひにてはあやしくみすくす口惜くおほえしわさなりさるはいときやうくなりやこのことのさまよなどの給に大将もかんの君もみなおり給てえならぬ花のかけにさまよひ給ふゆふはへいときよけなりおさくさまよくしつかならぬみたれことなめれと所から人からなりけりゆへある庭のこたちのいたくかすみこめたるにいろいろひもときわたる花の木ともわつかなるもえきのかけにかくはかなき事なれとよきあしきけちめあるをいとみつ、われもとをらしと思ひかほなる中に衛門督のかりそめにたちましり給へるあしもとにならふ人なかりけりかたちいときよけになまめきたるさましたる人のよういたくしてさすかにみたりかはしきおかしくみゆみはしのまにあたれるさくらのかけによりて人々花のうへもわすれて心にいれたるをおと、も宮もすみのかうらにいて、御覧すいとらうある心はへともみえてかすおほくなり行に上らうもみたれてかうふりのひたいすこしくつろきたり大将の君も御くらゐの程思こそれいならぬみたりかはしきかなとおほゆれみるめは人よりけにわかくおかしけにてさくらのなをしのや、なえたるにさしぬきのすそつかたすこしふくみてけしきはかりひきあげ給へりかろくしうもみえす物きよけなるうちとけすかたに花の雪のやうにふりか、れはうちみあけてしほれたる枝すこしをしおりてみはしのなかのしなの程にゐ給ぬかんの君つ、きて花みたりかはしくちるめりやさくらはやきてこそなどの給つ、宮の御まへのかたをしりめにみれはれのことおさまらぬけはひともしていろくこほれいてたるみすのつますきかけな

と春のたむけのぬさふくろにやとおほゆ御木丁ともしとけなくひきやりつゝ人
けちかくよつきてそみゆるにからねこのいとちいさくおかしけなるをすこしお
ほきなるねこをひつゝきてにはかにみすのつまよりはしりいつるに人々おひえ
さはきてそよ／＼とみしろきさまよふけはひともしぬのをとなひみゝかしかま
しき心ちすねこはまたよく人にもなつかぬにやつないとなくつきたりけるを
ものにひきかけまつはれにけるをにけんとひこしろふほとにみすのそはいとあ
らにはひきあけられたるをとみにひきなをす人もなしこのはしらのもとにあり
つるひと／＼も心あはたゝしけにて物おちしたるけはひともしなり木丁のきはす
こしいりたる程にうちきすかたにてたち給へる人ありはしよりにしの二のまの
ひんかしのそはなれはまきれ所もなくあらはにみいれらるこうはいにやあらむ
こきうすきすき／＼にあまたかさなりたるけちめはなやかにさうしのつまのや
うにみえてさくらのをりものゝほそなかなるへし御くしのすそまでけさやかに
みゆるはいとをよりかけたるやうになひきてすそのふさやかにそかれたるいと
うつくしけにて七八寸はかりそあまり給へる御そのすそかちにいとほそくさゝ
やかにてすかたつきかみのかゝり給へるそはめいひしらすあてにらうたけなり
ゆふかけなれはさやかならすおくらき心ちするもいとあかすくちおしまりに
身をなくるわか君たちの花のちるをおしみもあえぬけしきともをみると人々
あらはをふともえみつけぬなるへしねこのいたくなけはみかへり給へるをもも
ちもてなしなといと老らかにてわか／＼うつくしの人やとふとみえたり大將いと
かたはらいたけれとはひよらむも中／＼いとかる／＼しけれはたゝ心をえさせ
てうちしはふき給へるにそやをらひきいり給さるは我心ちにもいとあかぬ心ち
し給へとねこのつなゆるしつれは心にもあらすうちなけるましてさはかり心
をしめたる衛門の督はむねふとふたかりてたれはかりにかはあらんこゝらの中
にしるきうちきすかたよりも人にまきるへくもあらさりつる御けはひなど心に
かゝりておほゆさらぬかほにもてなしたれとまさ／＼めしやと大將はいと
おしくおほさるわりなき心ちのなくさめにねこをまねきよせてかきいたきたれ
はいとかうはしくてらうたけにうちなくもなつかしく思ひよそへらるゝそすき
／＼しきやおとゝ御覧しおこせてかんだちめの座いとかろ／＼しやこなたにこ
そとてたいのみなみおもてにいり給へればみなそなたにまいる給ぬ宮もあなを
り給て御物かたりし給つき／＼の殿上人はすのこにわらうためしてわざとなく
つはいもちゐなしかうしやうの物ともさま／＼にはこのふたともにとりませつ
ゝあるをわかき人々そほれとりくふさるへきから物はかりして御かはらけまい

る衛門督はいとたく思しめりてやゝもすれは花の木にめをつけてなかめやる
大将は心しりにあやしかりつるみすのすきかけ思いつることやあらむと思給い
とはしちかなりつるありさまをかつはかるゝしとおもふらんかしてやこな
たの御ありさまのさはあるましかめる物をとおもふにかゝれはこそ世のおほえ
の程よりはうちゝの御心さしぬるきやうにはありけれと思あはせて猶うちと
のよういおほからすいはけなきはらうたきやうなれとうしろめたきやうなりや
と思おとさるさいしやうの君はよろつのつみをおさゝたとられすおほえぬ
物のひまよりほのかにもそれとみたてまつりつるにも我むかしよりの心さしの
しるしあるへきにやと契うれしき心ちしてあかすのみおほゆ院はむかしものか
たりしいて給ておほきおとゝのよろつの事にたちならひてかちまけのさためし
給し中にまりなんえをよはすなりにしはかなきことはつたへあるましかれと物
のすちは猶こよなかりけりいとめもをよはすかしこうこそみえつれとの給へは
うちほゝえみてはかゝしきかたにはぬるく侍るいへの風のさしも吹つたへ侍
らんのにのちの世のためことなることなくこそはへりぬへけれと申給へはいかて
かなに事も人にことなるけちめをはしるしつたふへきなりいへのつたへなどに
かきとゝめいれたらんこそけうはあらめなどたはふれ給御さまのにほひやかに
きよなるをみたてまつるにもかゝる人にならひていかはかりの事にか心をう
つす人はものし給はんなにことにつけてかあはれとみゆるしたまふばかりはな
ひかしきこゆへきと思めくらすにいとゝこよなく御あたりはるかなるへき身の
程も思しらるれはむねのみふたかりてまかりて給ぬ大将の君ひとつ車にてみち
のほと物かたりし給猶このころのつれゝにはこの院にまいりてまきはすへ
きなりけりけふのやうならんいとまのひまゝちつけて花のおりすくすまいれ
との給つるを春おしみかてら月の中にこゆみもたせてまいり給へとかたらひち
きるをのゝわかるゝみちのほとものかたりしたまふて宮の御事の猶いはまほ
しければ院には猶このたいにのみものせさせ給なめりなかのおほんおほえのこ
となるなめりかしこの宮いかにおほすらんみかとのならひなくならはしたてま
つり給へるにさしもあらてくし給にたらんこそ心くるしけれとあいなくいへは
たいゝしきこといかてかさはあらむこなたはさまかはりておほしたて給へる
むつひのけちめはかりにこそあへかめれ宮をはかたゝにつけていとやむこと
なく思きこえ給へるものとかたり給へはいてあなかま給へみなきゝてもはへ
りいとゝおしけなるおりゝあなるをやさるはよにおしなへたらぬ人の御お
ほえをありかたきわさなりやといとほしかる

いかなれは花にこつたふうくひすの桜をわきてねくらとはせぬ春の鳥の桜

ひとつにとまらぬこゝろよあやしとおほゆる事そかしとくちすさひにいへはい
てあなあちきなの物あつかひやさればよと思ふ

み山木にねくらさたむるはこ鳥もいかてか花のいろにあくへきわりなきこ

とひたおもむきにのみやはといらへてわつらはしければことにいはせすなりぬ
こと事にいひまきはしてをのくわかれぬかむの君は猶おほいと、ひんか
しのたいにひとりすみにてそのし給けるおもふ心ありてとしころかゝるすま
るをするに人やりならすさうくしく心ほそきおりくあれと我身かはかりに
てなどか思ふことかなはさらむとのみ心おこりをするにこのゆふへよりくしい
たく物思はしくていかならむおりに又さはかりにてもほのかなる御ありさまを
たにみむともかくもかきまきたるきはの人こそかりそめにもたはやすきもの
いみかたゝかへのうつろひもかろくしきにをのつからともかくものゝひま
をうかゝひつくるやうもあれなと思やるかたなくふかきまとのうちになにはか
りの事につけてかゝくふかき心ありけりとたにしらせたてまつるへきとむねい
たくいふせければ小侍従かりれいのふみやり給ふ一日風にさそはれてみかきの
はらをわけいりて侍しにいとゝいかにみおとし給けんそのゆふへよりみたり心
ちかきくらしあやなくけふをなかめくらし侍などかきて

よそにみておらぬなきはしけれともなこりこひしき花の夕かけとあれと

一日の心もしらぬはたゝよのつねのなかめにこそはと思ふおまへに人しけから
ぬ程なれはかのふみをもてまいりてこの人のかくのみわすれぬ物にことゝひも
のし給こそわつらはしく侍れ心くるしけなるありさまもみ給へあまる心もやそ
ひはへらんと身つからの心なからしりかたくなむとうちわらひてきこゆれはい
とうたてあることをもいふ哉となに心もなけにの給てふみひろけたるを御覽す
みもせぬといひたるところをあさましかりしみすのつまをおほしあはせらるゝ
に御おもてあかみておとゝのさはかりことのついでに大將にみえ給ないは
けなき御ありさまなめれはをのつからとりはつしてみてまつるやうもありな
むといましめきこえ給をおほしいつるに大將のさる事のありしとかたりきこえ
たらん時いかにあはめ給はんと人のみたてまつりけん事をおほさてまつはゝ
かりきこえ給心のうちそをさなかりけるつねよりもおほんさしらへなければす
さましくしゐてきこゆへきことにもあらねはひきしのひてれいのかく一日はつ
れなしかほゝなむめさましうとゆるしきこえさりしをみすもあらぬやいかにあ
なかけくしとはやりかにはしりかきて

いまさらに色にないてそ山さくらをよはぬ枝に心かけきとかひなきことを
とあり